
深淵を引き裂く運命の剣

naka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深淵を引き裂く運命の剣

【Nコード】

N1395Y

【作者名】

naka

【あらすじ】

退屈な毎日を送っていたルークは天空から落ちてきた剣を手にする。そのとき、彼は第7音素の光に導かれ、そこで栗色の髪の娘と赤い騎士に出会う。

TOAとFATEのクロスオーバーです。捏造設定、改変などが含まれています。

そのようなものが苦手な方は避けられたほうが無難です。

どちらかというと、かなりシリアスな方向に行くと思いますので、

ご注意ください。また、ティアの設定が多大に変更されています。

タイトルとあらすじを変更しました。（以前のタイトル「TOA

×FATE（仮）」

序章

月が出ていた。

月の光が深淵を覗くように深い闇を照らし、荒れた大地に咲く白い花々が、震えるようにその身を揺らしている。

すべてに背を向けるようにして、崖の向こうに広がる海を臨み、遠く聞こえる潮騒を観客に、女性の透明な歌声が響く。

いにしえの約束はひとつの始まりと終わりを彩り、新しい約束を生んだ。

その歌は始まりと終わりを結んで、また新しい始まりとなる。この始まりを知る者は無く、新しい悲劇の幕開けとなるだろう。

やがて音も無く人影が姿を現し、彼女を伴って闇の向こうへと姿を消した。

月は今日も夜の闇を見ている。

第一章 焰と弓と歌姫と

燦々と輝く月光も木々の陰影に切り刻まれて、足元を照らすのは小さなカンテラと、地面に深く刻まれてた召喚陣の仄暗い光。虫の声も静まり絶え、かすかに吹き付ける風が木々の葉をざわめかせている。

そんな中で、一人の女性が長い髪をなびかせ、召喚陣の前で高々と詠唱を続けている。

乱れ飛ぶ音素を拾い、すり合わせ従わせる。

内に宿る異なる系譜の力を合わせ、混ぜて己に取り込む。

己の身体を一つの楽器として、魔力を糧に音楽を奏でるのだ。

この世ならざる地へとつながる何重もの扉を決じ開け、己を引き裂く重圧に耐えて、わずかにできた繋がりを辛うじて保つ。

「
告げる。」

すでに外と内との境界はない。

召喚陣からは嵐が逆巻き雷光が輝く。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

巻き上がる光に導かれるように、滔々と歌い上げる。

「誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

！」

そして、召喚の紋様が燦然と輝き、光の暴風が吹き荒れて世界は白く塗りつぶされた。

そして。

「問おう。君が私のマスターか。」

光と風の嵐が収まったとき、一人の騎士がそこに姿をみせた。

真っ白な髪と浅黒い肌、鋼のような鍛えられた身体に黒い鎧に赤い外套を羽織って、射抜くかのような観察するような眼でこちらを見つめている。

魔力の残り香が漂うその薄暗い森の中で彼女は彼と対峙した。

怖気づく心を無理やりに押さえつけ、その鋼色の瞳を強く睨みつけ彼女は口を開いた。

「ええ、そうよ。私があなたのマスター」

そう言っただけで彼女は薄紅色の手袋を脱いで、その契約の徴たる令呪をかざした。

彼はそれを見て皮肉げに顔をゆがめると身をただし宣誓の言葉を続ける。

「サーヴァントアーチャー、召喚に従い参上した。

これより我が弓は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。

ここに、契約は・・・」

カラン

乾いた音と共に再び光の渦が巻き上がり、轟音を共に結界と魔方阵は粉々に打ち砕かれた。

サーヴァントはすばやく女を抱きかかえ、飛びのいてその先にあるものに向け剣をかざして警戒を強めた。

舞い上がる土ぼこりの向こうに、何かがいるのを確認して誰何の声を上げる。

「何者だ」

無音。

彼らはさらに警戒を深めて見てみると、土煙は晴れぼろになった召喚陣の成れの果ての上に、長い髪の青年が倒れていた。

「へ？」

恐る恐る近づいて見れば、気絶したまま目を覚ます様子はない。それでもそのままにするわけにも行かず、どうしたものかと困惑

した様子で己の呼び出したサーヴァントを見た。

今日もまた代わり映えのしない一日であるはずだった。

キムラスカ王国・ファブレ公爵家の一人息子、ルーク・フォン・ファブレは第3位の王位継承権を持ち、いずれは国王となることも十分にありえる身の上であった。しかし、7年前の10歳の頃に敵国マルクトに誘拐され、その精神的ストレスを理由にすべての記憶を失ったということで、それ以降は屋敷内に軟禁されて育った。

身の安全を図るためという理由であったが、ルークにとってそんなことはどうでもよくて、速く外に出たいと目が覚めるたび眠るたびに思っていた。

外の世界がどれほど冷たく厳しいものであるのか、そんなことを想像することもなく、停滞した小さな世界の中でまどろむような日々を過ごしていた。

その時まででは。

その日はとても天気がよくて、青空に譜石帯がきらきらときらめいているのがよく見えていた。

ルークは屋敷からこっそりと抜け出して、裏庭に続く森の木の上に座って屋敷を眺めていた。どれだけ眺めていたって何が起きるでもなく、だからといってあきらめきれず、もやもやした苛立ちをどっしりともできなくて、

「代わり映えしねえーな」

そう吐き捨てて、ため息をついたとき、下の方から聞きなれた声が聞こえた気がして振り向いた。

「やっぱりここか」

そこには幼馴染でもある使用人のガイが苦笑を浮かべて見ていた。

「ルーク、おまえが勝手に部屋を抜け出したら騒ぎになるって言うたろ」

「なんでここが」

驚いた顔でそう言う「何年お前の世話をしてると思ってる」と笑った。

「ご主人様の行きそうなところぐらいわかるさ。使用人の鑑だろ？」

そうガイが茶化すようにウィンクすると、ルークは枝から立ち上がり身を乗り出すようにして、

「おれはガイのことただの使用人だなんて思ってたない！」

少し泣きそうな目でガイに向かって叫んだ。

この金髪と青い瞳の男はいつもそうだ。屋敷の人間に遠慮してそうやって線を引いて、そういう態度がどれだけいやな気分させるかわかってくれない。

身分だとか血筋だとかそんなの俺は知らない。

幼馴染で親友。それでいいじゃないか。

ガイはすつと視線をはずすと、「そうだな」と口をゆがめて笑った。

僅かに苦しげな表情を浮かべているのをルークは気にも留めない。せいぜい、口うるさい執事に文句を言われるかもしれないことが、気にかかるだけだろうとそんな樂觀的な感想しかなかった。

自分の意見が多少なりとも受け入れられたと思ったルークは少し機嫌をなおして、それでも機嫌の悪い顔をして偉そうにふんぞり返った。

「それでなんのようだ？」

改めてルークが尋ねると、ガイはそういえばといった顔をした。

「ガイ、ルークは見つかりまして？」

向こうの方から若い女性の声が聞こえてきて、ガイは振り返って手を振った。

ちよつと畏まった態度をして笑顔を浮かべ、ルークの方を指差す。

「ええ、ナタリア姫。あそこに」

「あ、ば、ばか。教えるなよ」

ルークはわたわたしながらガイに抗議の声を上げる。

その女性、ナタリアはむつとした表情を浮かべ手を腰に当てていた。

いつものようにルークの礼儀知らずな態度にあきれつつも、だからこそしっかり言ってあげなくてはという使命感で朗々とした声を

上げた。

「ルーク、そんなところで何をなさってるの」

その言葉にむつとしたルークは子どもっぽい表情で怒りだした。

「俺が何をしようと俺の勝手だろ！」

どうせこの屋敷から出られないんだ」

腕を組んでつーんと顔をそらして、17歳とは思えないような幼い態度でそんなことを言う。

ガイはそれを見て、やれやれといった顔で苦笑した。

わがままには慣れているが、ホントにしかたない奴だな。

仮にも婚約者なのだからもう少し優しくしてやってもいいのに。

そんなことをガイは心の中でつぶやいた。

ナタリアにとっても、ルークのそんな態度は慣れたものだったが、やはり気分のいいものではない。だが、彼の境遇を思えば哀れまらずにはいられない。

昔の彼を思えば今の彼はまったく別人だが、いつかあの約束を思い出して昔のように頑張っていける。彼との約束のためにもっと頑張らなければと心に誓うのだった。

ルークは跳ねるように木から飛び降りると、二人のすぐそばによつてきて相変わらず偉そうな態度をしてふんぞりかえった。

「それより！ おまえこそ何しに来たんだよ」

「ルーク、それが婚約者に対する「おい！あれなんだ？？」」

ナタリアの苦言を遮って、ルークが驚きの声をあげ走り出した。
誰が想像できるだろうか。

空の彼方から、きらめく光が落ちてくるのをガイとナタリアは呆然として見つめるしかなかった。

そのまま止まることなく地上に落ちて、三人が立っている少し離れた場所に突き刺さり、それが一振りの剣であることを気づかされた。

「おい、ルークちょっとまで。危ないぞ」

はっとして、ガイが制止の声を上げるが止まるはずも無い。
刺激の少ない退屈な生活をしているルークにとっては、危険であろうと止まる理由にならないのだ。

跳ねるようにすぐそばに走りより、周りを回ったり屈んでその剣の姿を観察していた。

「こりやいったなんのことだ？」

「マルクトの新しい譜業か何かでしょうか。」

ルーク、離れた方がよろしいのではなくて??」

二人のいさめる言葉も耳に入らず、ルークは剣に釘付けだった。

その剣は今まで見た剣の中でもとびつきり変わっていた。

鐔が音叉のような形をしており、中心に金色の宝玉、刃はまるでひびが入っているようなデザインがなされていた。

「すんげー」

ルークは目をきらきらさせて、今までに無いわくわくに胸を躍ら

せていた。

と、そんなルークにいつも彼を悩ませている激しい頭痛が生じた。それはいつも幻聴を伴っており、そのときもまた同じように聞こえてきた。

いつもなら、ただの厄介な頭痛というだけで少し休んでしまえば問題がないものであったが、そのときはタイミングが不味かった。激しい頭痛に体勢を崩し、あわててその剣の柄をつかんで身体を支えたとき、激しい光と音が生じ、ルークを巻き込んで爆風と共に光は彼方に飛び去っていった。

暖かい。

優しく暖かな光が目の前を横切り、すっと消えてしまうと身体が楽になる感覚がした。木々のざわめきと共に誰かが話している声が聞こえ、いったいどういうことだろうとルークは思った。

目を開けると周りは薄暗く、木々の間から漏れる月の光がちらちらと輝いているのがわかった。

目の前では、髪の高い女性と騎士風の男性が深刻な顔で何かを話している。

「共鳴現象？」

「ええ、第七音素同士が干渉しあって擬似超振動が発生したんだと思うわ。」

この剣、おかしいくらい第七音素が詰まっている。

なんでこんなことが・・・、あら目を覚ましたみたい」

女性ははつと気づくとルークのそばに駆け寄って、屈んで顔を近づけ心配げに青い瞳を細めた。

「だいじょぶ？ 痛いところないかしら。変なところがあるなら早めに言ってちょうだいね。一応、一通り確認したんだけど」

「あ、ああ。って、あんた誰？

つか、ガイとナタリアは？

屋敷の連中は何やってんだよ。

寝かしたままにしておくとか信じらんねー」

「えーっと。落ち着いて聞いてね。

ここは・・・「マスター敵襲だ！」嘘！大変！！」

これ持つてと言って剣をルークに押し付けたあと、女性は立ち上がリダガーを構えた。

がさつと草むらが揺れたと思った瞬間、まがましい目をした魔物が飛び出してきた。女性はそれに向かい走り出す。

その間にも赤い騎士が魔物を次々と仕留めていく。

二本の剣を構えて踊るように剣を振るい、魔物は引き裂かれ血が吹き出て地に落ちていく。

「何で魔物が・・・」

状況がさっぱり理解できなくて、ルークは呆然として立ち尽くしていた。

あまりの状況の変化に対応できず、その後ろから魔物が隙をうかがってることに気がつかなかった。

辛うじて立ち上がり剣を握っているのが精一杯で、これからどう

すればいいのかと彼らの立ち回りをうかがうのがやっとだった。

魔物達はそんな彼の心情など気にも留めず、うなり声を上げて後ろから飛びかかってきた。

「後ろ！！」

その警告にあわてて振り向くと、牙を剥き出しにした魔物達が押し寄せてくる。

ルークは剣を握り直して、魔物を見てみつともなく剣を振るった。うまく通らない剣に苛立ち、舌打ちをして後ろにいったん下が身体勢を立て直すと女性が歌を歌いだした

魔物の動きが鈍ったのを見てチャンスと思ったルークは、魔物に飛び掛り渾身の力を込めて剣を振るった。

感じたことの無い生々しい恐怖に怯えつつも、心を奮い立たせて襲いかかる魔物たちに立ち向かっていく。

一太刀一太刀に感じる死と言う現象に、言いよつの無い恐れを抱きながら。

そして1匹、2匹と押し寄せてくる魔物らを切り伏せ、これなら何とかかなりそうだと思ったとき。

カシャン

軽い破壊音を立てて剣が碎け散った。

「嘘だろ！」

あわててバックステップを踏んで、後方に下がったとき女性が前に立って魔物を打ち倒してこちらを振り向くと、あわてた表情で「

こつちよ！」といってルークの手を引いて走り出した。

後ろから魔物が次々と襲いかかろうと、彼らに向かって殺到していくのを赤い騎士が立ちふさがり切り伏せていく。

そして、森を抜け広く見通しのよい場所にたどり着いたとき、あまりの美しさに目を奪われた。

淡く輝く白い花が一面に咲き誇り、両脇に立つ崖の間に丸い月が顔を出して、その向こう側には驚くほど大きな水の鏡が月光に照らされてほのかに光っていた。

思わず言葉を失って、まるで時間が止まってしまったような気がした。

「アーチャー、やって！」

「了解した」

振り向くと赤い騎士が目の前に立って弓を構えていた。

何かをつぶやいたと思ったとき、強烈な爆風が吹き荒れて、押し寄せてきていた魔物達は消え去っていた。

その後にはなぎ倒された木々と抉れた岩と土が残されて、その威力のすさまじさを物語っていた。

「さて」

女性は啞然としているルークを見て、髪を掻き揚げて苦笑すると、

「私の名はティア。あなたの名前は？」

そう言って、また深く微笑んだ。

第二章 タタル溪谷にて

木々のざわめきがことさらに夜の静けさを演出して、薄く輝く白い花の美しさをさらに際立たせているようだった。

そんな場所で彼女、ティアは地面に手をついてうなだれていた。

「ルーク・フォン・ファブレ・・・、貴族、しかもあのキムラスカの・・・。」

その隣でルークは不機嫌そうな顔をしていた。

激しい戦闘が一段落して、名前を覚えてくれて聞いてきたから名乗ったのになんだよこの態度は。なんか衝撃を受けたような顔をして倒れるようにしゃがみ込んだと思ったら、この通り、人を無視してなんかぶつぶつ言ってるし。

「ごたごたしたのが終わって、やっと何がどうなってるのか教えてもらえと思ったのに、これじゃあ振り出しじゃないか、役に立たない奴だなとそんなことを考えてた。」

額にしわを寄せて見ていたが、ふと不安になってきた。

彼女も屋敷の人間みたいに変な態度をとるんだろうか？

身分とか言うやつか？そんなの関係ないのに。

不安に任せてルークはティアに荒々しく声をかけた。

「おい、いつまでそんなことやってるんだよ。」

それよりここどこだ？

ガイとナタリアは？

何でモンスターがいるんだ？

なあ、ここどこなんだ??」

そんなルークの声を無視して、しばらくぶつぶつ言っていたが、突然むくつと立ち上がって、

「ま、いいか。」

釣り上げたら海老と一緒にマグロと鯛がついてきたようなものだわ。

何事も前向きに行かなきゃ、前向きに」

こくこくと頷いて、晴れ晴れとした笑顔でどこかポイントのずれたことを言っていた。そして、後ろに立っていた赤い騎士は「私は海老なのか・・・」と少し傷ついた表情でばやいていた。

「ああ、ごめんなさい。ここはタタル溪谷よ。」

あなた、超振動、擬似超振動だったかしら?でここまで飛ばされてきたみたいね。いきなり上から召喚陣に降ってきたからびっくりしちゃったわ。しかも、結界もなにも崩壊させちゃうし。

第七音譜術士同士でさえめったに起こらないっていうのに、いったいどういうことかしら」

ティアは何事も無かったかのように、ルークに解説を始めたが、知らない単語ばかりでよけいに混乱が増すばかりだった。

「はあ?　なんでタタル溪谷??」

それにちょーしんどー?　なんだそりゃ?」

「さあ、なんでかしら??」

それから、超振動っていうのは同一の音素振動数を持つ音素同士が干渉し合うことで起こる、ありとあらゆる物質を分解し再構築す

る現象よ」

「だー、わけわかんねー。

俺を屋敷にかえせよ!!」

「いきなりかえせって言われても・・・」

ティアは困惑に言葉を詰まらせたが、その様さえもルークにとっては苛立ちの種にしかない。

と、そんな二人を揶揄するように嫌みったらしい言葉が振ってきた。

「やれやれ、何だと聞いておいてその有様か。この世界の貴族様は1から10まで説明してもらうどころか、1の説明に100の説明が必要なようだな。

これならまだ幼い子どものほうがまだ可愛げがあって付き合いやすい」

「なんだと!？」

「それとも何かね？」

よしよし可哀想だねとでも言っしてほしいのかね？」

「っ、てめー。何だよ、違うに決まってるだろうが!」

「はいはい、喧嘩はだめ。

アーチャーも挑発するようなこと言わないでよ」

ティアの諷めるような言葉に赤い騎士、アーチャーはフンツと鼻で笑ってそっぽを向いた。

その様子にルークはさらに腹を立てて、向かっていこうとしたがティアが呆れた顔をして割って入った。

「ほらほら、落ち着いて。ね？」

あんまり大きな声を出してたら魔物がまたよって来るわよ」

「っ、魔物？」

引きつった顔であちこちを確認するルークに苦笑して、

「ここは見通しがいいし、さっきのこともあるからすぐに来ることは無いわ」

安心させるようにそう言った。

「はあ、なんだよ。驚かせやがって」

そうため息を吐くルークにティアは思わずといった表情でくすくすと笑った。

それからすぐに真剣な表情をして青い瞳をまっすぐに向けて言った。

「安心して、必ずあなたを無事に屋敷に送り届けてあげる」

そんな彼女の真剣な表情にうろたえて、明後日のほうをむいて

「あ、あたりまえだろ」

と、彼は弱々しげに呟いた。

遠くに見える海には月の光がさして、光の帯が波に揺れ滲んでいる。

ここ一面に咲く花はつつましげに身を震わせて、絵画のようなその光景に寂しげな色をつけている。

想像もつかなかったような美しい光景に、思わず目を奪われて、ルークは文句を言うのも忘れてそのまま遠くを見ていた。

ティアはそれを横目にちゃきちゃきと野営の準備を始めていた。

「今日はもう、ここで休みましょう。」

もう、夜も遅いし森を抜けるのは危険だわ」

「ええー、こんな土の上で寝るのかよ。」

毛布もベットもないのにどうやって寝ればいいんだ？

もー、信じらんねー」

苛立ちもあらわに吐き捨て「こんなところにいられるかよ！」と森に向かってずんずんと歩き出した。

「ルーク」

今までに無い強い語調に思わず振り向くと、ティアはついつと手を振り下げて一言を唱えた。

「G u t e おやすみなさい
N a c h t」

何だろうと思う暇も無く、彼は強い眠りに引き込まれそのまま地面に倒れこんでしまった。

「はあ、つつかれたー」

ティアはせいせいしたといった表情で座り込んだ。

ルークの前では平気な顔をしていたが、実際には限界でどうしようもなく眩暈がして倒れそうだった。召喚に加えて突然の魔物の襲来で、体力も何もかも底をついてしまつて、もうすでに気力だけで動いてるようなものだったのだ。

それを傍観していたアーチャーは、やれやれといった呆れた表情を浮かべていた。いつの間集めたのか、野営に必要な薪を抱えてきてテキパキと焚き火の準備を始めている。

「マスター、ずいぶんと安請け合いしたようだが本気か？」

「本気よ」

「そんな面倒なことをせずとも、「アーチャー、これは決定事項よ」やれやれお優しいことで。これは先が思いやられるな」

「アーチャー」

「これは失礼、なにせ来て早々に戦闘で満足に話もできず、それが終わったと思えばマスターはお子様の相手にかかりつきりで、何のために召喚されたのか心配になつてね」

ティアは綻ぶように微笑んで首をかしげた。

「あら、拗ねちゃったのかしら？」

「いや、別に」

「ふふっ」

「そんなことより、マスター」

アーチャーはコホンと咳をして、仕切りなおすように表情を引き締めた。

「さっきは余計な邪魔が入って、大切なことを聞き忘れていたが、マスターの名前は？ 私はマスターをなんて呼べばいい？」

不意を突かれたように驚いた顔をしていたが、すっと顔を背けて黙り込んでしまった。

不審に思ったアーチャーが言葉をかけようとしたとき、強い意志を瞳に宿してはつきりとした語調で彼の問いに答えた。

「ティアよ。ティアって呼んで」

そう言っふつと表情を緩めた。

「オールドラントにようこそ、異世界の英雄」

遠くから微かに鳥の鳴き声が聞こえる。

「ルーク、ルーク！ 起きて、起きてったら！」

ルークは小さくうなり声を上げて寝返りを打ち寝ぼけた声で

「うるさいなあ。いいだろ別に、もう少し寝かせてくれー」

「起きてっつてば、ねえ」

「ううー、うつせー!」

ガバツと起き上がり苛立たしげに叫んだ。

「何だよ。うるさ・・あ?

ここどこだ?え?あれ??」

日の光に目を眇めながら、ぼんやりあたりを見渡した。
それをティアとアーチャーは呆れた様子で見ている。

「おはようルーク、もう朝よ。

さっさと起きて準備して、早く出発しないとまた森の中で野宿する羽目になるわよ」

「あれ?森?

えっと、裏庭でだべってて、剣を見つけてそれで・・・」

「まだ寝ぼけてるの?

ここはタタル溪谷、忘れたの?

話してたら急に寝ちやうんだから焦ったわ」

つらつと私は何も知りませんといった顔で話すティアに、アーチャーは顔を背けてにやける顔を押さえていた。

「それよりほら、寝癖。

ご飯ができてるから食べましょ」

その言葉にルークはしぶしぶ身を起こし、背伸びして大きなあくびをした。

いい天気だ。雲ひとつ無く、青い空が広がっている。

いつもならもう一眠りできるのにとはいつつ、促されるままにすでに調理された料理の前に座った。

シンプルなスープと軽くあぶったパン、あと少量のピクルス。

今いるところを思えば十分なものであったのだが、贅沢な食事で育ったルークにとっては衝撃だった。

目を点にして料理とティアの顔を見比べている。

「どうしたの？早く食べないとスープが冷めるわよ」

「これだけ？」

「わがまま言わないで、今はこれで精一杯なんだから。

旅の途中で豪勢な料理なんてできるはずないじゃない」

「はあ？信じらんねー。だっせーな」

「はいはい、わかったから早く食べてね」

めんどくさげに軽い感じで追い立てられて、ムツとしたがそれでも空腹を感じていたのでしかたなく食べることにした。

「あ、うまい」

スープを一口飲んでぼそっとつぶやく。

ルークは育ちのよさが滲み出る優雅な手つきで次々と料理を口の

中に放り込んでいった。

それを確認するとティアも料理に手を伸ばした。

しばし彼らは無言で食事に専念していた。

と、ルークがアーチャーの方を見て、眉をひそめた。

「なあ」

「ん？なんだね？」

目をつぶって立っていたアーチャーはルークのほうを流し見て首を傾げる。

「あんたはご飯食べねーのか？」

「いや、私は「そういえば、サーヴァントって食事必要なの？」、マスター」

アーチャーは眉をひそめてティアの方を見た。

「かまわないわ。どっちなの？」

じつとティアの方を見つめたが、根負けしたようにため息を吐いて軽く首を振った。

「食べられないことはないが基本的にサーヴァントに食事は不要だ。十分な魔力供給があれば空腹を感じることも無い」

「そう・・・なら食べる？」

「いや、結構だ。ただでさえ少ない食料を減らす必要は無い。
私なんかのために振り分けるより、その食べ盛りの子どもにた
くさん食べさせるといい」

「子どもって俺のことかよ！
ちよつと背が高いからっていい気になりやがって！」

「まあまあ、いいじゃない。小さくたって」

「よくねー！！」

「あ、おかわりいる？」

「・・・いる」

そう言つてそつとティアに食器を差し出した。
なんとなく手玉に乘せられたような気がして、ルークはそこはか
とない敗北感にがつくりとした。

それでも、料理はとても美味しかった。

第三章 道中にて

「ごちそうさまー。」

ま、まあ、見た目の割にはまあまあ美味かったよ」

相変わらずルークは偉そうにふんぞり返ってそう言った。

それを聞いたアーチャーは嫌味ったらしい笑みを浮かべ

「それはそれは、こんな貧しい食事でも満足していただけたようで恐縮至極。」

腕を振るった甲斐があるっていうものだ」

「はあ？何だよその言い方。ム力つくやつだな。
だいたいなんだよそれ、偉そうに」

「もう、喧嘩しないの。」

・・・アーチャーごちそうさま。

いきなり自分が料理するって言うからどうなるかと思ったけど、
すごくおいしかったわ。・・・まあ、ホントは私が作りたかったんだだけ」

「ティア、朝からあんなものを作るうっていうのは間違ってると思うぞ」

「いいじゃない、朝からたい焼きだって」

「いいや、朝はバランスの良い食事を取らないと身体に悪い。
甘いものだけの食事など認めん」

「えー」

「は？ティアが作ったんじゃないの？
ていうか、たい焼きってなんだ？」

「豆で作った甘いペーストをかりつとした生地で包んだお菓子よ。
あんこはわざわざ手作りをしたんだから」

ティアは片付ける手を止めて、大きな胸をむんつと張ってそんなことを言った。

「ティア、食器はこちらに。
食後のお茶でもどうかね？」

アーチャーは何事もなかったかのように、ティアにお茶を勧めた。

「もらうわ。ルークも飲むでしょ？」

ティアもその言葉にうなずいて、ルークに尋ねた。
ちらちら彼女の胸を見てたルークはあわあわして、目を彷徨わせたあとに慌てて首を縦に振ってうなずいた。

「あ、ああ。飲む飲む！」

「あれ、このコップってどこから？
さっきの食器もそうだけど、どこにしまいこんでたの？」

そんなルークに気づくこともなく、彼女はついさっきから抱いていた疑問を自分の従者に投げかけた。

「なに、ちょっとした手品さ」

そんなことを言いつつ、彼はどことなく気品さえ感じる優雅な手つきで手早く、ついっついっとお茶を注ぎ込む。

「ふーん」

和やかな空気が流れる。

「っだー、そもそも！

お前誰だよ！

それに昨日のあれ！あれっていったいなんだ！？」

ルークはハツとしたようにコップから顔を上げて、自分の疑問を穏やかな空間に叩きつけた。

「誰と聞かれてもな。さて、なんと答えれば満足なのかね？」

アーチャーは変わらないペースでヤレヤレと首をすくめ、鼻を括ったような言い方で返事をした。

ムツとして詰め寄ろうとしたルークを制して、代わりにティアが口を開いた。

「彼はアーチャー、弓の騎士のクラスのサーヴァントよ」

「あん？ そのサーヴァントってなんだ？」

「えっと、サーヴァー」そこまで説明する必要はあるまい、日が暮れてしまうぞ。逐一説明していたらいつまでたっても出発できまい」

むー。またそんな言い方して」

「くー、むっかつやつだな！」

「じゃあ、そろそろ出発しましょうか。」

できれば日が暮れる前に森を抜けてしまいたいし」

ルークの怒り声を軽く聞き流して、ティアはそう言うと言って残りを片付けて、荷物が入ったバックを持って森の中に歩き出した。

「あ、おい」

一瞬唖然としたあと、ルークもあわててその後ろをついて歩き出した。

ティアは入り組んだ山道を迷いなく、時々周りを警戒しつつ慎重に道を選んで進んでいた。ティアに続くルークの後ろにはアーチャーが続き、後方の警戒に当たっていた。

どれほど警戒してもやはり魔物の襲撃を逃れることはできず、その度にルークはみつともなく驚きながらも対応に当たることになった。

どうして自分がとルークは思わなくもないのだが、何故か必ずといっていいほどルークのほうに魔物が飛び掛ってきて、剣を振るわざるを得ない状況になっている。その度にやれ脇が甘いだの、やれ良く見てタイミングを合わせろだのと赤い騎士からの嫌みっただしい助言が飛んできた。腹は立つのだが妙に的確な助言なので文句も言えず、ただただイライラが募るばかりだった。

「っこの！『双牙斬』」

飛び掛つてきた魔物を軽く避けて、力を込めて剣を振り下ろし、その勢いを借りて飛び上がり切り裂いた。

切り裂かれて血まみれになった魔物の姿に思わず立ちすくんだとき、その隙を突くかのように横から別の魔物が飛び掛ってきた。

「つく」

引きつった顔をして剣を構えようとしたとき、後ろから剣が放たれてまっすぐに魔物の額に突き刺さった。

「戦闘中に気を緩めるなといったはずだが」

すぐ横を赤い影が通り過ぎ、魔物に突き刺さった剣を抜き取ると一瞬のうちに残りの敵を切り捨てていく。

そして注意深く周りを見渡したあと、振り向きもせずティアのすぐそばに歩いていった。

「ティア、怪我はないか」

「え、ええ。特に問題ないわ。ルークは？」

ティアは乱れた服を直しつつそう答えて、ルークのほうを見やっていた。

「あ、ああ。こんなの俺様にかかればたいしたことないって」

思わずといった風にルークはそう答えた。

実際のところは、慣れない実践でミスを連発していたが、それを

おくびにも出さずに見栄を張っていた。

彼女はそれに気づかないふりをして微笑んで、ふと立ち止まって見てルークのそばに駆け寄った。

「そこちよつと怪我してるじゃない！」

ルークはその剣幕に驚いてのけぞったが、それさえも気にせず、彼のすぐそばに立ち止まると左腕をつかんで手をかざした。ぼそつと何かをつぶやくと仄かな光が傷口のあたりに広がり、見る見るうちに傷が消えていった。

それを目を大きくして見ていると、また、アーチャーが苦言を溢した。

「過保護なことだ。わざわざ魔術で癒すほどのことでも「譜術よ」何？」

だがしかしそれは・・・「譜術」、了解した。譜術だな」

言葉を遮って、強く告げた言葉にしばし困惑した目をしていたが、納得したという風に頷いた。

「っだー。どっちでもいいから早く離せ！」

その声にティアは掴んでいた腕を慌てて離して飛びのいた。

そして、コホンと咳をして何事もなかったかのように繕って、

「じゃ、じゃあ行きましようか」

とそう言って歩き出した。

それからしばらく歩いて、やっと森から抜け出した。
ルークは大きく伸びをしてせいせいしたといった感じで

「やっと抜けたー」

と叫んだ。

「ったく、木はうぜーし邪魔だし土はぬかるんで滑るしもーやだ。
早く帰って屋敷のベツトで2度寝したいぜ」

そう言って、後ろを振り向くとアーチャーがティアも付き添うようにして彼女のそばに立っていた。支えようと手を差し伸べる彼に、彼女は嫌々するように身をよじって拒んでいた。

「だから、まだ大丈夫だってば」

「いや、しかしだな」

振り払う手は弱々しく、ついにはバランスを崩し倒れそうになった。

それを素早く支えて「だから言ったのだ」などといいながら、そっと木陰の下に座らせた。

「悪いがマスターを見ていてくれないか。向こうで水を汲んでくる」

「あ、ああ」

剣幕に押され思わず頷いたルークを横目に素早く走り出した。

「お、おい、どうしたんだ？」

おずおずとルークはティアに尋ねた。

さっきまでぴんぴんしていたのにどうしたんだろうか。あんなに散々引つ張りまわしていたのに。屋敷まで送ってやるって自信満々に言っていた癖に、こんな調子で大丈夫だろうか。

そんな考えが自分本位なものであるなど気づくわけもなく、少々不機嫌なそれでいて不安げな表情を浮かべている。

「ん。だいじょーぶ。あ、ありがとー」

いつの間に戻ってきたのやら、アーチャーが濡れた手ぬぐいをティアに差し出している。

「少し休んだほうがいい、顔色が悪いぞ」

ティアは上の空で手ぬぐいで顔を拭くと、丁寧にたたんでアーチャーに返して手袋をしっかりとつけ直して弱々しげに笑った。

「心配性だなあ。このくらい大丈夫よ。」

ちよつと、むこうの川で顔洗ってくるわ。よつと」

身体を重たげに起こすと、ティアは川のほうに歩き出した。

アーチャーが何か言いたげにしているが、見ないふりをして川のほうへと行ってしまった。

ルークは行ってしまったティアと不機嫌なアーチャーを交互に見比べていたが、どうでも良くなつてため息と共に座り込んだ。

「あー、だつせーなあ。なんだよ一体」

「ふん、大方世間知らずで我侘なお坊ちゃんの相手をしていて消耗したのだろ。わがマスターながら心優しいことだ」

「なんだと!？」

突っかかっていくルークを見やって、アーチャーは嫌みったらしい語調で答えて、またティアの方に目を向けた。ほんの少し目を陰しくして黙り込む。

「なんだよ」

「いや、なんでも」

そう言いつつも、ティアのほうへ向ける目をそらしはしなかった。

「ごめんなさい。待たせたかしら」

「ティア、やはり今日はもう休んだほうがいい」

「え、ええ？まだ日が高いわよ？」

アーチャーの言葉に少しの焦りを滲ませて答えたが、やはり過労の色は隠せていなかった。

「今日はここで野営にしよう、いいな」

「えー」

「やった、つつかれたー」

ティアは不満げな顔をしたが、ルークのご機嫌な声を聞いて諦めたの、かしぶしぶまた座り込んだ。栗色の髪を手袋をした手で戯れに漉いてぶつぶつ言っている。

「もう、大丈夫だつて言ってるのに」

「ごまかしても無駄だ。もう、魔力がほとんど残っていないぞ。サーヴァントの呼び出しで魔力をだいぶ持っていかれたというのに、こんな無茶をするなど無謀にもほどがある」

ティアはクドクドと説教をするアーチャを恨めしげに見ていたが、彼は歯牙にもかけず言葉を続けた。

「まったく、それなのに残りの魔力で限界の身体を動かすなど自殺行為だぞ。」

こんなことでマスターを失うなど、笑い話にもならない」

「・・・ごめんなさい」

しょんぼりとした顔をみて表情を緩め

「まあいい。過ぎたことはしかたあるまい」

そう言つて、ティアの頭を軽くぽんぽんと叩く。

ティアは少し不思議そうな顔をしたが、やわらかい笑顔を浮かべて頷いた。

それをルークは何故か機嫌を損ねた顔で見ている。

「あーもう！よくわかんねーけど、これからは気をつけるんだぞ！

俺さまが師匠に習った剣でしっかり守ってやるんだから、お前は責任持って俺を屋敷まで連れてけ！

自分の言ったことは責任取れよ！」

「ほほう」

ルークの言葉にアーチャーはにやりと笑った。

「その言葉、間違えないな」

「お、おう」

妙な迫力にうろたえながらそう答えると、アーチャーは朗らかな表情で続けた。

「ならば、暫く私は霊体化していよう。なに、あれだけ実践を積みば何とかなるだろう。魔力の消費を抑えればそれだけマスターの負担も減るしな」

そう言つと、一瞬の内に姿が見えなくなった。

泡を食っておろおろするルークにどこからともなく笑い声が聞こえる。

「き、消えた！消えちゃったぞ、おい！」

ティアは指を刺して動揺した顔でこちらを見るルークに苦笑して、

「そりゃそうよ。もともと魔力で無理やり実体化させてたんだもの。魔力をカットしたら霊体化するのは当然だわ」

「当然で、おい」

「大丈夫よ、すぐそばに控えてるし何かあつたらすぐに実体化して対処してくれるわ。そうでしょ？」

『もちろんだ。マスターの盾となり剣となるのがサーヴァントの仕事だ』

苦笑にも似た声音で、どこからともなく声が降ってきた。

「うお！びつくりした！なんだよいきなり！」

「・・・びつくりした？」

「・・・え？もしかして今の聞こえた？？」

ルークはおろおろとあちらこちらを見ている。

「・・・アーチャー」

『了解した。お坊ちゃんこの声が聞こえるかね？』

「っだー！！だから坊ちゃんて言うんじゃないねー！！隠れてないで出て来い！」

「えー？」

ティアは目を丸くして呆然と立ちすくんでいる。

『ルーク聞こえる??』

「だーうぜー。何だよさっきから」

拳を振り回してガーガー唸るルークを見やって、ティアは頭を抱えていた。

通常、何もせずにラインが繋がるなど有りえない。しかも、マスターとサーヴァントと同時に繋がるなんて。

召喚陣に飛び込んできたことが原因だろうか？　だが、そんな事例など記録には残っていない。

うーんーうーんと唸ってるティアにルークはふと不安げな顔を浮かべて

「大丈夫か？　また具合悪くなったのか？」

と恐る恐る聞いてきた。

ティアはその言葉に「大丈夫、何の問題もないわ」などと、笑って答えた。

なおも不安げにしているルークに「今日は私が腕を振るうわ、楽しみにしててね」、などと言いつつも、これからどうするべきか深く悩むのだった。

第四章 答えの出ない問い

「るるーるるららんらーら、らららるららりらー」

ティアが鍋を掻き混ぜながら歌を歌ってる。

長い栗色の髪をしつかりと束ねて、目を心なしかキラキラさせている。

微妙にずれる音階も鍋のコトコト煮立つ音に混じって、絶妙なハーモニーを奏でている。

手持ち無沙汰なままで、ルークはなんとなくティアを見ていた。

ティアは変なやつだと思う。こんな辺鄙な森の中で変な男と突っ立ってるし、変なサーヴァントとか言う奴を引き連れてるし、俺の言うことを適当に聞き流すしかと思ったら、時々優しいし。

少なくとも悪い奴じゃないのかなぁ。俺を屋敷まで連れてってくれるっていうし。

あー、でもせっかく外に出たんだからいろいろ見て回りたいな。でもなあ、うるせー小姑みたいな奴がついてくるからなあ。

そこまで考えて、ちらつと周りを見渡した。

アーチャーは相変わらず姿が見えない。

ついさっきまで、やれ少しぐらいは手伝えとか皿を持って行けなとど煩かったが、ティアに窘められて今はとても静かだ。

例えるなら執事のラムダスみたなものだろうか？ でも、そうだというには何か違う気がする。上手い喻えが見つからない、もしかしたら昔の俺なら分かる・・・？

いや関係ないや、気分悪りー。

できたよーという明るい声に呼ばれて、ルークは思考をカットして料理をせつせと並べているティアのそばに歩いていった。

夕焼けも姿を消して、無数の星が夜空を飾っている。

微かな草々のざわめきと虫の歌声が耳に優しく、子守唄を聞いているようだ。

ティアは金色の櫛で髪を梳かしながら、眠るルークを見ていた。炎の陰影が揺れて赤い髪がさらに燃え立つようきらめいて見える。

一体、彼は何なんだろう。何故、召喚陣の上に落ちてきたの？あの剣は何で碎けたの？ 何でラインがつかってしまったの？疑問ばかりが頭に浮かんでは消える。

それでも、ラインを切ってしまったわらないのは、無理に手を加えようとして彼を傷つけることになるのを恐れたからだ。でも、私情なんてそんなもの……。

櫛を梳く手を止めたため息を吐く。

そもそも、何でわざわざ送ってあげようなんて思ったんだろう。何かあったときのためにと、わざわざサーヴァントの存在さえ明かして。

いくら考えても答えは見つからない。

それでも、かわかることをやめるなど絶対にしたくない、と思っているのもごまかせない事実だった。

ため息を吐く。

「ため息ばかり吐いてると、幸福が逃げていくぞ」

いつからいたのか、すぐそばでアーチャーが呆れた顔をしてティアを見ていた。

「さっきからずっとその坊やの顔を見ていたが、始末をつける算段でもついたかね？それとも惚れた？」

「ば、馬鹿！ほ、ほれた？？な、ななななんのそれ！そ、そんなことあるはずないでしょ！ば、馬鹿なこと言っでないで、おとなしく霊体化してなさい！

そんなことわざわざ実体化して言わないで。ライン越しで十分よ！」

「そんなことをいうがな、先ほどからずっとライン越しで声をかけていたのだが」

「ヤレヤレといった顔で肩をすくめ、苦笑交じりにそんなことをいつてきた。」

「え？ああ？そうだった？」

「まあ、私としても恋の戸惑いにゆれる見目麗しい乙女の姿をじつくりと見られて得をしたがな」

「な、なななあn1k j!」

「ふっ、冗談はともかく、そろそろ寝たほうがいい。休めるときに休んでおかないと、身体が持たないぞ」

「わ、わかったわ」

ティアは動揺した顔を隠して、手に持った櫛を小さな小箱に片付けて懷にしまいこみ、しずしずと毛布に潜り込んだ。相当疲れていたのか、すぐさま小さな寝息が聞こえてくる。

焚き火の跳ねるような小さな音が静かな夜の空間に響いている。

アーチャーは無言で周りを見渡すと、ため息を吐いて霊体化した。空を見やれば、譜石に付き従うように星が輝いている。

千里眼のスキル持ちであるアーチャーでも、さすがに譜石に浮かぶ文字を読むことはできない。

もちろん、読めたからといって意味のあるものではないのだが。

『スコア
予言か・・・』

おかしい世界だ、何もかもが予言通りに進むなどと。

戦争も平和もすべて予言通りに進む世界。まるで機械仕掛けの箱庭のようだ。

決められたタイミングで決められた動作をこなせば、何もかもすべてが正常に動く世界。なんて寒々しいんだろう。

まあ、世界の奴隷として殺戮を撒き散らすことしか能のない私に、そんなことを言う資格などないだろうが。

ユリア・ジュネは何を思ってスコアを残したのだろうか。いや、そもそもスコアとは何だ？ 何もかもがすでに定められている？

それはまるで根源の渦のようではないか。では、第7音素は根源に何か関係があるのでは？

・・・いや、考えすぎか。どちらにしても判断材料が足りない。

炎の跳ねる音と寝息が聞こえる。

ティアは小さく寝返りを打って何かを引き止めるように手を伸ば

し、パタツと降ろした。うにやむにやと何か寝言を言っているようだ。

アーチャーは姿を現すとティアに毛布をしっかりとかけなおした後、優しく髪をなでた。

召喚されてその夜に、この世界には魔術は存在しないとハッキリと彼女は言い放った。この世界で主流なのは譜術という音素を用いた術だと。

しかし、彼女の使っている術はどう見ても自分が慣れ親しんでいる魔術だ。

その存在しないはずの魔術を使うこの少女は一体何を背負っているのだろうか？

異世界の英雄は夜の帳が空けるまでの間、答えの出ない問いに身を沈めていた。

「ルークー！！ねえ見て！蝶々！」

「だぁー！！見りゃわかるだろ！うつせーな」

旅路は小さな衝突を繰り返しつつも順調に進んだ。

なんだかんだ言いながらも、走り出すティアを追いかけていくルークに、アーチャーは霊体化したままの姿で思わず笑みを浮かべた。心配した魔物との戦闘も危なげなくこなせるようになり、余計な魔力の消費も抑えられてティアが体調を崩すこともなかった。

戦力増強のために、森の中でわざとルークに魔物をぶつけた甲斐があるというものである。

「ティア！」

遙か遠方に立ち上がる煙と光を見て、アーチャーは前方を走るマスターに声をかけた。

「わかつてる」

ティアはまっすぐ音が聞こえた方向、すでに通り過ぎたローテルロー橋の方を見つめて、何が起こったのかと険しい表情で探っていた。

「あれは・・・マルクト軍?? 陸上装甲艦が何を追ってるのかしら」
首を傾げて考え込んだ。

「はあ? マルクト軍?? つーか、見えるのかよ」

ローテルロー橋はすでに遙か彼方で、ルークの目ではとても確認できない。

どれだけ目がいいのだろうと変なものを見るような目で二人を見た。

「え? あ、ええ、見えるわよ? ルークも見たい??」

「見れるのか! 見たい!」

ルークは瞳を輝かせてティアの方に詰め寄った。

「いいわよ。アーチャーちょっと視界を借りるわよ」

「何もそこまでしてやらずとも・・・」

アーチャーが困惑したような顔で二人を見ていたが、ティアはそれにかまうことなく、ルークの肩を掴んだ。

「ちよつとごめんね」

そういつてティアはルークの額にこつんと自分のおでこをくつつけた。

ルークは驚いて、身体をよじって飛び退き、指差した腕をぶんぶん振ってティアに向かって叫ぶ。

「な、何しやがんだおまえはー!!」

「ちよつとー、それじゃあ術をかけられないでしょ。見たいんじゃないの?」

ティアは口を尖らせて不満そうな顔でルークを見た。

「くつつかないと見せられないんだから、ほら!!」

そういつて、強引に引き寄せると額をくつつけて小さな声で何かを唱えた。

すると、いきなり視界が変わって威風堂々とした大型の乗り物が土煙を立てて猛スピードで走っていくのが見えた。

陸上装甲艦は暫く砲弾を打ち合っていたが、突然その場に停止した。

すると突然前方に光と炎が立ち上がり爆風を放って、もうもうとした黒煙と共に石でできた橋が崩壊していった。

と、いうところでふっと視界が元に戻った。

ルークが目を丸くして顔を上げると、ティアの綺麗な顔がすぐそばにあるのに驚いて慌てて飛びのいた。

「な、なんだよあれ！」

「だから、マルクト軍の陸上装甲艦だつてば」

「そうじゃなくって、なんでそんなのが見えるんだよ！」

「ああ、ルークの視界に私のライン経由でアーチャーの視界を移したの。よく見えたでしょ？」

「はあ？なんだそれ」

「もう、そういう術なのよ。その程度の認識でいいわ。どうせ細かい説明してもきかないだろうし」

「はあ・・・」

その言葉に反発しなくてもなかったが、どうせ説明されても難しい単語を並べられるだけだろうと気にしないことにした。

「アーチャーの視界ねえ。・・・気持ちわりー」

「それはこちらの台詞だ」

アーチャーが苦虫をかみ殺したような顔ですぐそばに立っていた。

「うおわ！びっくりしたー！」

ルークの言葉を見無視してティアを見て言葉を続ける。

「術をつかったようだが身体は大丈夫か？」

「心配性ね、大丈夫よ」

いたずらっぽく微笑んでティアは己の従者に答えた。

「それに魔力はルークから拝借したし」

アーチャーはルークを見た後、納得したように「なるほど、それなら問題はない」とうなずいたのだった。

「は？何の話だよ！おいこら！」

「それにしても困ったわ」

文句を言っているルークを見無視してティアは言葉を続けた。

「こんなところでマルクト軍にぶつかるなんて。面倒なことにならないければいいんだけど。」

ケセドニアにまっすぐ行く道は難所だから、遠回りでエンゲープに向かっているけどもしかしたら失敗したかもしれないわね」

「ふむ、そこまでキムラスカとマルクトとの関係は緊迫化しているのか？」

「そうね。今は辛うじて均衡を保っているけど、辺境では小規模な戦闘が起ったりしているらしいわ。すぐに戦争することになることはないでしょうけど・・・」

「うだー！いいからとっとと行くぞ！
いいかげん野宿は飽きた。早く町にいった宿屋のベッドで寝るぞ
！」

そんなルークの言葉に二人は顔を見合わせ苦笑するのだった。

第四章 答えの出ない問い（後書き）

ケセドニアへの道はルークたちの装備では突破するのが難しいということにさせていただきました。

この小説での独自設定です。ご了承ください。

NGシーン 第一章〜第四章（前書き）

本編に関係の無いコネタです。特に読まなくても問題はありません。
息抜きにどうぞ。

NGシーン 第一章〜第四章

第1章

テイク1

「問おう。君が私のマスターか。」

そこにはよくわからない大きな体格の生き物が立っていた。
緑色でぼつちやりとした身体、大きな目をしてこちらを見ていた。

「さーヴぁんと、らいだー。召喚に従い参上しましたー。
真名はガチャピンだよ、よろしくね」

「チェンジ」

テイク2

「問おう。君が私のマスターか。」

そこには赤いモジャモジャ髪、白い肌に赤く大きな唇が特徴の明るい空気の人が立っていた。

「サーヴァント・ランサー、召喚に従い参上したよ。
世界中の子どもたちに愛を振りまく優しいピエロ、ドナルド・マクドナルドだよ。」

よろしくね、らんらんるー！」

「らんらんるー」

「らんらんるー」

ティアとランサーは踊りだした！！

第2章

「はいはい、わかったから早く食べてね」

めんどくさげに軽い感じで追い立てられて、ムツとしたがそれでも空腹を感じていたのでしかたなく食べることにした。

「む、むむむ！！」

このスープを作った奴は誰だぁー！！！！

俺が海原 山の孫弟子だとしての狼藉かぁー！！」

アーチャーが爽やかな笑顔で

「殺してしまっても構わないかね？」

とティアに聞いていた。

第3章 道中にて

「誰と聞かれてもな。さて、なんと答えれば満足なのかね？」

アーチャーは変わらないペースでヤレヤレと首をすくめ、鼻を括ったような言い方で返事をした。

ムツとして詰め寄ろうとしたルークを制して、代わりにティアが口を開いた。

「ウルトラの国からやってきた光の戦士、正義の味方のウルトラヒーローよ」

「え？」

「この星を悪の宇宙人から救うために、わざわざ数億光年の彼方からやってきたの」

「おおー」

「そう、その名はウルトラマンシロウ！」

残念！ 3分立ったので帰ってしまった！！

第四章

ティアは金色の櫛で髪を梳かしながら、眠るルークを見ていた。炎の陰影が揺れて赤い髪がさらに燃え立つようきらめいて見える。

ティアはおもむろにマジックペンを取り出すとルークの額に「肉」と書き鼻の下にガイズル髭を書き込んで満足げにうなずいた。

「ティア・・・、何をしてる」

「やっぱりこれって定番だと思うの。アーチャーも何か書く？」

アーチャーはペンを手に取ると、頬にぐるぐると丸を書いて鼻の先端を黒く塗りつぶしたのだった。

NGシーン 第一章〜第四章（後書き）

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

第五章 無知とリンゴ

窓の向こうに白い森が続いている。

何もかもが雪に埋まって、わずかに見える木々さえも白く染めてしまおうというかのように、粉のような雪がさんと降っていた。ぼーっとそんな風景を見ていた。

呼びかける声が聞こえて振り向くと……。

「ルーク、ルークってば！おーきーて！！」

「ううーん。ティア、もつと寝かせろよ」

弾むような声にまぎれて、夢の白い幻影は消えてしまった。

「早く起きないと、毛布剥ぐよー」

10秒前、9・・・省略！はい、終了ー」

フェイントを突いて、おもむろに毛布を引っ張った。

ルークがしっかり毛布に抱きついてたせいで、ルークも一緒に引きずられていく。

「いてててて！！」

「ティア、毛布が痛む」

アーチャーのどこかのんびりした言葉に、ティアはハッとして立ち止まった。

少し困った顔で毛布とアーチャーの顔を見比べた後、「毛布さん

「ごめんなさい」と申し訳なさそうな声で謝った。

ルークはガバツと立ち上がると、顔を真っ赤にして「毛布に謝ま
ってないで俺に謝れ！」と叫んだが、全然反省する様子も無い。

「やれやれ朝から元気なことだ」

軽く首を振って呆れた顔で二人を見た後、濡れた手ぬぐいをルー
クに投げ渡し手元のこまごましたものを片付けながら言い放った。

「早く準備しろ、このペースなら昼にはエンゲーブにつけるだろう。
まあ、箱入り息子のお坊ちゃんが道の真ん中でダダをこね始めれ
ば無理だろうがな」

「やんねーよ！」

「ふ、だといいんだがな」

「くーむかつく！」

ルークは拳を震わせて睨みつけ、アーチャーはどこか楽しそうな
ティアに声をかけた。

「ティアもだ。坊主で遊んでないで、早く準備をしろ」

小うるさい言葉に追い立てられて、二人はいつものように食事を
始めた。

ルークは質素な食事にかなり不満そうな顔をしているが、文句を
いうと途端にアーチャーがすごい勢いで小言を言い始めるので黙っ
ている。

「好き嫌いをしていると大きくなれんぞ」

黙っていてもやはり小言は付き物のようである。

ルークは小魚のフライを一齧りして、すこし嫌な顔をして皿の脇によける。

そしてその横のイモのサラダに手をつけようとしたところで、ティアが声をかけた。

「ルーク、フライいらないの？」

「ああ、魚嫌いだ」

「えー、美味しいのに」

そう言いつつ、おもむろにルークのほうに手を伸ばすと食べかけのフライを摘んで口に入れた。

「うん。おいしい」

「あー、人の口つけたものを食べるのはよくないんだぞー」

「え、そうなの？ どうして？」

「・・・あれ？ なんでだろ？」

残念ながら、ルークは間接キスなどという概念を知らなかった。そして、ティアの方もそれは範疇外だった。

アーチャーはそんな残念な会話を無言で聞かなかったことにして、もっぱら給仕に専念していたのだった。

「あ、そうだ。ルークにお願いしたいことがあるんだけど」

「あん？」

エンゲーブに続く道を歩いているとき、ティアはおずおずといった調子でルークに声をかけた。

ルークはおやつにと渡された、小さなたい焼きを口に入れつつ振り向いた。

「アーチャーのこと黙っててほしいの」

「はあ？なんで」

ティアは自分の口をハンカチで拭って、ポケットにしまおうと少し困った顔で言葉を続けた。

「えっと、ここから先は敵国の勢力圏内だから、念のために奥の手は隠しておきたいの」

「いいじゃんべつに」

あっさりと言い放つルークに、ティアは眉をひそめ固まった後、ちよっと考え込んですぐにどこか意地の悪い笑顔を浮かべた。

「それにサーヴァントのこと誰かに知られると大変なことになるの。例えばね・・・ちよっと耳貸して」

ティアは顔をそっとルークの耳のそばに寄せて小さな声で話し始

めた。

「サーヴァントをばらしたらね・・・ごによごによ・・・。それでその人は・・・ごによごによ。で、そしたらね・・・・・・・・なの」

最初はめんどくさげな顔をして聞いていたが、だんだんと顔を青ざめさせて立ち止まり、ギギギと首を動かしてティアの方を振り向いた。

「まじで?」

「うん」

「わ、わかったよ!べ、別に怖いわけじゃないけど、ティアがそんなに言うなら黙っててやるよ!」

手をぶんぶんと振り回して言った後、ルークは勢いよく歩きだした。

そんなルークの後姿を見ていたティアにアーチャーが不審げに声をかけてきた。

『ティア、いいのか?』

「ばれなきゃいいの、ばれなきゃ。念押しに軽い暗示もかけておいたから問題ないはずよ」

『なるほど』

「おい、早く行くぞ!」

「わかってるってば」

ティアは荷物を持ち直して、ルークの後ろを追いかけたのだ。
った。

風車が青空を巻き込んで大きな羽をぐるぐると回している。

草原に姿を現したエンゲープは穏やかで、さまざまな作物が植えられている。

ある場所では華美さは無くとも暖かみのある花々が咲いて、またある場所では実を鈴なりにつけて重みで体を揺らしている。

ティアはルークと露天に向かう道をゆったりと歩いていたが、ブウサギの柵の前でぴたつと足を止め、ブウサギを見つめたまま無言。そのまま身動きもしない。

「ティア、ティア！！行くぞ！」

「え、あ、うん。わかったわ」

はっとして返事をする、名残惜しげに時々振り返りつつ、ルークが行く先についていった。

露天ではさまざまな作物が並べられ、軽快な売り声が道々に響いていた。

ルークはその活気に驚き、歓声を上げた。
さっきまでの不機嫌はどこへやら、周りをキョロキョロと見渡している。

エンゲープの町を外から見たときは、汚いだの狭いだの臭いだの

散々文句を言い放っていたがそんなことも忘れて、道々に並んでいる店を夢中で見ている。

ティアはそんなルークになんともいえない表情を向けていたが、横から店主の引き止める声に足を止め売り物に目を向けた。

と、そのすぐそばで店主と客が噂話を始めていた。

「おお、聞いた聞いた！漆黒の翼がマルクト軍に追いかけられてたんだろ？」

「ああ、危機一髪のところを華麗に逃走したらしいぜ」

「ローテルロー橋が落ちたってな」

「まあ、追い詰められたらなあ。でももしかしたら漆黒の翼じゃなくてマルクト軍が・・・」

「馬鹿、マルクト軍がするわけ無いだろ？」

「そんなもんか」

「しかし、漆黒の翼もよりにもよって橋を落とすなんて・・・」

「まったくだ、流通が・・・」

『どうやら、あのときの騒ぎは漆黒の翼とやらのせいらしいな』

『そう見たいね・・・こっちとこっちどっちがいいかしら』

2本のとうもろこしをつかんで比べるようにして見てるティアに、アーチャーは迷わず片方を指し示すと、呆れたように続けた。

『それよりいいのか？』

『へ？』

こんな旅の途中で買ってどうするのか、ホクホク顔でとうもろこしを買い込むティアにアーチャーは苦笑交じりに指差した。

指先の向こうではルークが店先のりんごを前に店主と大騒ぎをしている。

片手に食べかけのりんごを持っておろおろしているようだ。

大変！と買ったものを仕舞い込むと、慌ててティアは走り出した。

ルークは綺麗に切ったりんごを頬張りながら、羽ペンを滑らせていた。

軽い気持ちで齧ったりんごせいで酷い目にあつた。

漆黒の翼という盗賊と勘違いされて、町の男たちに囲まれて引きずられた挙句、ローズっていうおばさんとジェイド・カーティスっていう嫌味なおっさんの前に突き出されたのだ。

後からやってきたティアはティアで、下手にファブレの名前を名乗るなつて指図してくるし。（それにしても、齧ったりんごの代金はティアが払ってたし、食べ物でなんであんなに騒ぐんだろう？）

ティアがそのカーティス大佐？に漆黒の翼はマルクト軍が追いかけてただろということを話してるところで、導師イオンつてのがひよっこりと顔を出してチーグルが盗んでいったって言い出した。

引きずっていったおっさんたちは謝っていたけど、腹の虫がおさまらねー。

ティアはなんか機嫌が悪いし、アーチャーは嫌味たらたらし・・。

つらつらと、いままでのことや今日あったことなどを書き記しているところで、ひょっこりとティアが頭越しにノートを覗いてきた。

「ルーク、何を書いてるの?？」

「うわ、見んなよ」

「ごめんなさい、でも・・」

「あーもう。ただの日課！記憶障害が再発したときのために日記をつけとけて言われてるんだよ」

「・・・記憶障害?」

探るような目に目をそらしてルークは言葉を続けた

「10年前のことはゼーんぶさっぱり。一つも思い出せやしねー。それなのに危ないから屋敷から出るなって、ずーっと屋敷の中で軟禁。やってらんねーよ」

「それはいかな」

アーチャーは音も無く姿を現すと、訳知り顔で話し始めた。

「記憶を取り戻したいのであれば屋敷の中にとどめておくよりも、さまざまな場所に行ってさまざまな経験をつむべきだ。

今まで行った場所や思い出の場所、友人知人に合ってみるのもよ

いな。とにかく現状維持など悪手としか思えん」

「そうね、いままでとは違う場所で働くのもいいかも。例えば果物屋さんとか？」

「そうだな、運搬行や農業なども悪く無いだろうな」

「あと、ぬいぐるみを着る仕事とか、ドレスを仕立てる仕事とか」

「ふむ、舞台上で女形をやるのも似合うかも知れんな」

「そんな仕事やってられるか、馬鹿！」

口の中に放り込んだりんごは何故かすっぱかった。

第六章 ローレイ教団の象徴

不機嫌な顔でルークはベツトに飛び乗った。

いつも二人して人をからかいやがって！

そんな風に思っ、彼は組んだ足に肘をついて手に頬を乗つけたまま唸った。

だいたいなんだ？なんで食べ物盗まれただけで、あんなに大騒ぎするんだ？どいつもこいつもわかんねー。

宿屋の丈夫で素朴なベツトは彼を乗せて軽く軋んで、清潔な木綿のシーツは太陽の匂いがした。

屋敷の優雅な生活に慣れているルークにとって、そんな素朴で質素な宿屋はとも違和感の感じられるものだった。

落ち着いて見て見れば、旅の途中にあれだけ望んでいた宿屋も自分の屋敷と比べてしまっ、不満ばかりが胸に浮かぶのだった。

それをなんでもないので、隣でくつろいでるティアを見ると何故だかいらいらして、どうしていいのかわからなかった。

ティアは手元に地図を広げて、これからの道筋を確認しているふりをしつつ、機嫌の悪そうなルークをちらちらと見ていた。

アーチャーの機転で気まずい雰囲気になるのは避けられたが、彼の機嫌は最悪でちょっと突っつくだけで風船のように弾け飛びそうだった。

そんな不器用な二人をアーチャーはやれやれと見ていた。

サーヴァントは子守やお見合いを取り持ったためのものではないのだがなあ。

そんな風に思っ、軽くため息をついた。

そういえば、と言葉を譲り合うような雰囲気の中でアーチャーが話し出した。

「あの導師イオンというのは何者だね？」

あの年ですいぶんと敬われているようだが」

「そうね、ローレライ教団のことは説明したかしら」

「ああ、天才譜術士ユリア・ジュエが残した2000年に渡るすべてを記録する預言^{スコア}だったかを守り、預言を詠む事で人を導くという世界的な宗教団体だったな」

「そう、導師イオンはローレライ教団の最高指導者よ。」

マルクト帝国とキムラスカ・ランバルディア王国の休戦に尽力した方で、平和の象徴とも言われているわ」

アーチャーは顎に手を当てて、難しい顔をしてティアを見た。

「なんでそんな人間がこんな辺鄙な場所に・・・」

「ええ、どうやらあのカーティス大佐と行動しているようだけど、いったい何のつもりなのかしら。」

^{フォンマスターガーディアン}導師守護役がそばに付いているみたいだから、ローレライ教団も公認の旅なのだと思うのだけれど・・・」

「導師守護役？」

「導師の親衛隊よ。^{オラクル}神託の盾騎士団の特殊部隊、公務には必ず同行するの」

「しかし、わざわざマルクト軍の大佐と行動するなど不自然だな。軍と行動せずとも教団にも兵力は存在するのだろ？」

「ええ、神託の盾騎士団というのがそれにあたるわね」

「ふむ、神託の盾騎士団を使えない理由があるのか・・・？」

「どうしてもマルクト軍に頼まなければいけない理由があるのか、それとも強制されているのか」

「強制されているって感じではなかったわ」

「それは一見ただけでわかるものでもあるまい」

「そうだけど」

「あーうつせー！」

ルークは話を途中まで興味しんしんで聞いていたが、導師がマルクト軍と行動している理由の考察に入ると、そのまどろっこしさにいらいらし始めた。

「ぐだぐだ言ってねーで直接聞きに行けばいいじゃねーか。めんどくせー。」

「だいたいなんだよ、チーグルって。聖獣だか何だかしらねーがなんでわざわざ食料庫なんざ漁るんだよ」

「ルーク、直接って言っても彼らが正直に話すわけ無いでしょ。目的によつてはこちらが排除されることだってありえるわ」

「ティア、先ほどから気になっていたのだが、チーグルとはなんだ？」

ずいぶんと、大切にされているようだが」

「東ルグニカ平野の森に生息している草食獣よ。始祖ユリアと共にローレライ教団の象徴になっているわ。」

生息地は、そうね、ちょうどこの村の北あたりかしら」

「ふ、聖獣がこそ泥か。聖獣とやらもずいぶんと落ちたものだ」

「アーチャー、そんな言い方ないわ。そう、きっと何か理由が・・・」

「理由があるうとなかろうと泥棒は泥棒だ」

「あーめんどくせー。決めた！ チーグルの棲む森ってのはエンゲーブから北だって言ってたよな？」

「え、ええ、それがどうかしたかしら」

「明日になったらその森に行って、そいつらが泥棒だって証拠突き止めてやる」

「はあ？」

「このままじゃ、帰るに帰れねー。やってもいないことを押し付けられるなんて我慢なんねーよ。きっちり締め上げてギッタンギッタンにしてやる」

「ルーク、何もそこまでしなくても・・・。
でも、チーグルかあ。チーグル・・・みたいかも」

「ティア？」

「え、いやあのその、わざわざ聖獣に指定したくらいだからきっと可愛いに違いないと思ったり思わなかったり、でもちよつとあのその・・・」

ティアは両手をぶんぶんさせて首を振りながらそんなことを言っていた。

顔を赤らめて恥じ入るように言葉を詰まらせる。

アーチャーは眉間にしわを寄せて額に手を当てて、痛みをこらえるように黙り込んだ。

そんな二人をルークは首をかしげて見ていたが、発明家が発明の糸口を見つけたかのような笑顔を浮かべると、ティアのすぐそばに走りよった。

広げた地図をわたたと片付けているティアのすぐそばにしゃがみこみ、にかつと笑っていった。

「じゃあさ、一緒に行こうぜ」

「一緒に？」

「そう、一緒に」

困りきった顔でルークを見つめるティアに、焦ったように顔を背けて顔を掻き、もぞもぞした態度をしていたがすぐに開き直った態度で叫んだ。

「いいから、明日、絶対、行くの！」

「私は反対だ」

「え？」

アーチャーは黙り込んでいたが、皮肉っぽい表情でそう言い捨てた。

「マルクト軍がうろつろしているようなところで物見遊山など正気とは思えん。」

ただでさえ、キムラスカの貴族なんていう爆弾を抱えているのに、うろつき回るなど虎の尻尾を踏みに行くようなものだ」

「はあ？なんだよそれ。俺が悪いって言うのか？」

「ああ、お前が悪い」

「・・・」

「・・・」

「サーヴァントとして、マスターをキムラスカとマルクトのゴタゴタに巻き込ませるような真似はできないな」

「うつせーな！なんかあったら、俺が！親父に頼んでも何とかしてやるよ！」

てめーはおとなしく後ろでうじうじしてろ！」

「ほう、その言葉間違えないな？」

「も、もちろんだよ」

「と、彼はいつてるがどうする？」

緊迫した彼らの言い合いに、言葉も挟めずにおろおろしていたティアは、いきなり言葉を振られてびくつとしてアーチャーを見た。

「私としては反対だが、マスターがどうしても行きたいということであればマスターの意思を尊重する。サーヴァントとして最大限マスターの安全を保障しよう」

ティアは不機嫌なルークと皮肉げな表情をした己の従者を交互に見たあと、己の意思を控えめな表情で述べたのだった。

色鮮やかな緑が日の光に輝き、何かの鳴き声が木々に反響して聞こえる。

アーチャーは護衛対象の二人からわずかに離れ、木に登って上から彼女らを見ていた。

ルークは相変わらず偉そうに何事かをあれこれと言って、ティアはティアでそんなことを気にも留めずに忙しなく周りを見渡し、あれこれと指し示しては何かを言っていた。

そんな二人を木の上から暫く見ていたが、彼女らが行く先に何かが起こっているのに気づいて、己のマスターへ急いでそのことを伝えることにした。

「え？イオン様が？」

「あん？どうした？あの陰険白髪親父がまたなんか言ってるのか？」

「・・・あとで説教決定ね。それより！向こうでイオン様が魔物に襲われてるって、アーチャーが」

「せつきょ・・・いやそうじゃない、なんで魔物なんかに」

「急ぎましょう、護衛は一体何やってるの！」

そう言っでティアは森の向こうへと走り出した。
ルークも慌ててその後を追う。

暫く行つた先に、白い法衣を着た少年が音叉をかたどつた杖を構えて虎のような魔物を見据えていた。

3匹の魔物は唸り声を上げて、じりじりとその包囲網を締めようとしている。

「あれは、ライガだわ！」

「おいおい、やばくねーか？」

飛び掛つてくると見るやいなや、厳しい目つきで拳を振り上げて光輝く音素フォニムを手のひらに集め地面に手を打ちつけた。すると地面に光で書かれた譜陣が描かれて、一瞬にして魔物たちは光の中に消え去っていた。

疲れきつた顔を上げて立ち去ろうとしたが、立ちくらみを起こして崩れ落ちた。

「イオン様！」

「お、おい！」

二人は慌てた表情でイオンのそばに駆け寄った。ルークはすぐそばにしゃがみこみ大丈夫なのかと声をかける。

彼は繕った笑顔を浮かべ大丈夫と答えた。

「少しダアト式譜術を使いすぎただけで・・・、ああ、すみません」

ティアの差し出した手を取って立ち上がると、二人の顔を見て驚いた表情を浮かべる。

「あなた方は、確か昨日エンゲーブにいらした方ですね」

「ルークだ」

「ルーク。古代イスパニア語で『聖なる焰の光』という意味ですね。いい名前です」

彼はルークを見て優しげに笑ってそう言った。

その言葉を聞いてルークはすこし顔を赤くして、「そ、そうか」と言い捨てた。

「私は・・・、神託の盾騎士団モース大詠師旗下情報部第一小隊所属、ティア・グランツ響長であります」

畏まったようなすこし厳しげな表情を浮かべて、ティアはルークに続いて自己紹介をした。

「ああ、あなたがヴァンの妹の。彼はいまだ行方不明という話です

が、あなたも彼を探しに？」

「いえ、まあ任務中です」

ティアは複雑な表情を浮かべ、視線をそらした。

「はあ？お前、ヴァン先生の妹なのか？つか、行方不明って何だよそれ！」

詰め寄るルークに途方にくれたような顔をして周りを見渡して、あれ？といった表情を浮かべる。

「あれは・・・」

森の奥の木の影から長い耳の小さな影が素早い仕草で横切った。

「チーグルです！」

そうイオンが叫んだのを聞いて、ルークは彼女と小さな影を見比べた後、「あとでしっかり説明しろよな」と叫んで走り出した。

その後姿に、ティアは額に手を当てて軽くため息をついたのだった。

第七章 彼らの理由

「余計なことを言ってしまったでしょうか？」

額に手を当てて難しい顔で考え込むティアに、イオンは気遣わしげに彼女を見上げて、労わるような声で尋ねた。

「いいえ、遅かれ早かれ知られることですから・・・」

ティアはどこか力なく笑ってそう答えた。

「おい、お前ら早く来い！見失っちまうじゃねーか」

ルークの叫び声に二人は顔を見合わせた後、苦笑しあって歩き出した。

「あーもう、のろのろしてるから逃げられちまった」

周りを見回しながら小走りで二人のすぐそばに戻ってくると、忌々しげに舌打ちをしてはき捨てた。

ティアはふつと虚空を見つめ黙り込んだ後、まっすぐ彼方を指差した。

「チーグルはあっちに行つたみたい、巢があるのかしら」

とても驚いた様子でイオンは彼女を見た。

「確かに聞いた話では、チーグルの巢はこの先に行けばあるはずで

すが・・。

しかし、何故？」

「企業秘密です」

ティアはにつこりと笑って疑問を封殺するかのように答えた。

それを横で見ていたルークは呆れたように鼻を鳴らしたが、ふつとイオンを見て眉をひそめた。

「まったく、ふらふらじゃねーかよ。ろくに戦えないくせに、こんなところに来るんじゃないよ」

「すいません、ですがエンゲーブでの盗難事件がどうしても気になつてしまって・・・」

「はあ？何言つてんのお前？関係ないじゃんか」

「しかし、聖獣と言われるチーグルが人に害をなすなんて、何か事情があるはずです」

そういつてイオンはあごに手を当てて悩ましげに眉をひそめた。

「チーグルは魔物の中でも賢くて大人しい。人間の食べ物を盗むなんて、おかしいんです。チーグルに縁がある者としては、見過ごせません」

「魔物のことなんて、放つときゃいいだろ」

「そうですね。僕は変わり者かもしれませんが」

ルークの無神経な言葉に、イオンは一瞬黙り込んで傷ついたような顔を浮かべたが、押し隠すように固い言葉で答えて矛盾する優しい笑顔を浮かべた。

「ですが、チーグルと接触できれば事の真相がわかると思います」

ルークは馬鹿にしたような顔で彼を見たが、断固とした態度を崩さないのを見て、呆れたように肩をすくめた。

「ふーん。つまり、目的地は一緒ってことだな」

目をぱちくりさせてイオンはルークを見た。

「では、お二人もチーグルのことを調べにいらしたんですか」

「濡れ衣着せられて大人しくできるかつつの」

鼻を鳴らしてそんな風に答えた後、ティアを指差して

「こいつはただ単にチーグルを見たいだけだけだな」

「ちょっと！わざわざそんなこと言わなくていいじゃない！」

ルークの大暴露に、顔を赤く染めて食ってかかった。今までの借りを返してやったぜと言わんばかりの勝ち誇った顔でニヤニヤしている。

「もう、イオン様の前でそんな話しないでよね。」

・・イオン様、ここはとても危険です。ここから先は私たちが調

査をしますから、どうぞ村にお帰りください」

「いいえ、どうしても今回の騒ぎの真相が知りたいのです。」

ティアの冷淡とも取れる言葉にイオンは慌てて、言いすがった。

「チーグルは我が教団の聖獣ですし、彼らのやったことは教団にも責任があります」

「あーもう、仕方ねえな。お前も付いて来い」

「ちょ、ちよつとルーク！」

食ってかかるティアに軽く追い払うように手を振りながら、めんどくさそうに答えた。

「こんな青白い顔で今にもぶっ倒れそうな奴、ほっとく訳にもいかねーよ。」

それに村に送って行ったところで、また一人でノコノコ森へ来るに決まってる」

「あ、ありがとうございます！」

その言葉にイオンは顔を輝かせて、明るい声を上げる。
ずずつと身体を近づけて「ルーク殿は優しい方なんですネ！」と笑った。

ルークは顔を赤らめてそっぱをむくと、「アホなこと言ってねーで、大人しく付いてくればいい」などと言い放った。

「あ。あと、魔物と戦うのはこっちでやるから、あの変な術は使わないよ？」

お前、それでぶっ倒れたんだろ」

「ま、守って下さるんですか！ 感激です！ ルーク殿」

それを聞いて慌てきつた表情で振り向いて、ほんの少し後ずさった。

赤い顔はさらに赤くなっている。

「お、大げさに騒ぐなっ！ 違うって、足手まといだっつつてんだよっ！ それと、俺のことは呼び捨てでいいからなっ！ 行くぞ！」

「はい！ ルーク！」

イオンは嬉しくてしょうがないといった感じで頷くと、逃げるように森の奥へと走り出したルークの後ろを追いかけていった。

彼らの後姿をティアは物足りなさそうな羨ましそうな顔で見ているが、ふっと虚空を見つめくると表情を変えた後、慌しく逃げるように追いかけていった。

その後ろから、どこからともなく赤い騎士の笑い声が聞こえた気がした。

それから、木々の隙間を縫うように続く道をしばらく歩いていくと、小山のような大木にぶち当たった。

木の幹に捲るように大きく穴が開いている。

どうやらチーグル族の住処はこの木のうろの中にあるようだ。

イオンは無造作にその穴の中へ歩いていった。

追いかけるように続くルークの後ろで、ティアは軽く後ろを見渡して白い手袋を付け直すとしっかり杖を握りしめてその後が続いた。

うろの中はとても暗く、空間を支えるようにして無数の枝が絡み合うように伸びていた。滴るような緑色の苔が上から降り注ぐ日の光に輝いて、暗いうろの中は辛うじて足元が見えるだけの光を確保していた。

ルークとイオンは言葉を交わしながら、うろの中にいる大量のチーグルたちを見ていた。

その後ろからティアが入ってくると、チーグルたちは何に驚いたのか怯えたように後ずさり、ついには積み重なるようにして壁際に張り付いてしまった。

ティアは驚いたように目を見開いていたが、やがてふっと顔を緩めた。

すると何故だかチーグルたちはほっとしたようで、小山のようだった塊はなだれのように元にもどっていった。

その流れにイオンは不思議そうな顔をしていたのだが、そんなことを考えている暇はないと考えて、チーグルたちに近づいていった。

チーグルたちの群れがわずかに左右に割れて、年老いた様子のチーグルが大きな腕輪をもって現れた。

「おぬしたちは・・・ユリア・ジュエの縁者、か？」

恐る恐るといった風に老いたチーグルは明瞭な言葉で問いかけて

きた。

「おわっ！ま、魔物が喋った！」

「ユリアとの契約で与えられたリングの力だ・・・。
お前たちはユリアの縁者か？」

イオンは軽く頷くと、誇るように名乗りを上げた。

「はい。僕はローレイ教団の導師イオンと申します。
あなたはチーグル族の長とお見受けしましたが」

「いかにも」

それを聞いて、ルークは傲慢な態度で指差して言い放つ。

「おい、魔物。お前ら、エンゲーブで食べ物を盗んだだろ」

「・・・なるほど。それでは、我らを退治にという訳か？」

「はっ、盗んだことは否定しないのか」

「チーグルは草食でしたね。何故人間の食べ物を盗む必要があるのです？」

「・・・チーグル族を存続させるためだ」

イオンのすぐ横に並んで立っていたティアは無言で杖を握りなおした。

すると、チーグル族の長は慌てたように「ほ、ほんとうだ！」と

言い募った。

「わ、我らの仲間が北の地で火事を起こしてしまったのだ。その結果、北の一角を住み処としていたライガが、この森に移動してきたのだ。我らを餌とするためにな」

イオンは納得したように頷いた。

「では村の食料を奪ったのは、仲間がライガに食べられないようにするためなんですな」

「ああ、そうだ。定期的に食料を届けぬと、奴らは我らの仲間をさらって喰らう」

「そんな、なんてことを・・・」などと呟くイオンの横で、ルークは忌々しげにはき捨てた。

「はんつ、なんだよそれ。弱いモンが食われるのは当たり前だろ？ しかも縄張り燃やされた？ 頭にも来るのも当然だろうよ」

「しかし、しかしそうかもしれないませんが、そんなものは本来の食物連鎖の形とは言えません！」

黙って言い争う二人を見ていたティアは難しげな顔をして口を開いた。

「さて、どうしましょうか？

チーグルが食料泥棒の犯人だと判明しましたが、村に突き出したところで今度はライガたちが餌を求めて村を襲うでしょうね」

「しらねーよ、あんな村なんか」

ルークはふてくされたように言い捨てた。

「そうは行きません。エンゲーブの食料は、このマルクト帝国だけでなく世界中に出荷されています。あの村を失うわけにはいかない」

「食料の流通が滞れば飢え死ぬ人だって出てくるでしょうね」

二人は厳しい口調で次々とエンゲーブの重要性を説いた。

ルークはうろたえた様子で二人を見て、むくれたように顔を背けた。

「じゃあどうしたらいいんだよ」

「ライガと交渉しましょう」

「はあ？」

「交渉・・・ですか？」

イオンの提案に二人は驚きの声をあげる。

「そのライガってのも喋れるのか？」

「僕たちでは無理ですが、チーグル族を一人連れて行って訳しても
らえば、もしかしたら・・・」

「では、通訳の者にわしのソーサリーリングを貸し与えよう」

長老が群れに向かって呼びかけると、群れの中から水色の毛をしたチーグルがおずおずとした様子で顔を出した。

長老に比べて一回りほど身体が小さくて、どうやらチーグルの子どもらしい。

「なんだあ？」

「この子どもが北の地で火事を起こした我が同胞だ。これを連れて行って欲しい」

長老から腕輪を受け取ると口を開いた。

「ミユウですの。よろしく願いするですの」

「・・・なんかむかつくぞ、おい」

いらっとしてルークはチーグルをにらみつけた。

「ごめんなさいですのー」

「だあー、あやまるな！うっせー」

そんな理不尽なやり取りに、ティアはいつものように呆れたと言わんばかりのため息をついていた。

第七章 彼らの理由（後書き）

ほぼ、原作どおりの流れになります。

アーチャーの出番はほとんどなし。ごめんなさい。

第八章 守るべきもの

ライガクイーンの住処から遙か遠く、木々を挟んで肉眼では目視できない位置にアーチャーは立っていた。

太い枝の上に立ち、鷹の目を光らせてその獲物を確かに捕らえている。

アーチャーは弓を構えて100分の1秒も目を離すことなくその姿を見据えていた。

己のマスターを含む3人がその魔物に近寄るのを確認して、思うままに振るまえない自分に齒噛みした。

交渉などリスクが高すぎる。どこかに行って下さいと言って素直に従うなど、樂觀的にもほどがあるぞ。あの導師はいったい何を考えているのだ？

ままならない状況に苛立ちつつも、マスターの指示が飛ぶのをただひたすらに待ち続けていた。

ルークは唸り声を上げているライガクイーンを見上げていた。

優雅にさえ見える毛並みは激しく逆立って、白い牙をむき出しにして今すぐにでも襲いかかってきそうだ。

その威圧感に思わず剣の柄に手が伸びる。

ティアもすぐにでも詠唱を開始できるようにと、すでに杖を構えていた。

「ミュウ、ライガ・クイーンと話してください。

私たちは交渉しにきたのだと」

イオンは武器を構える二人を制して、前に出て通訳するようミュウを促した。

元気に返事をしてミュウはライガクイーンに近づいてまくし立てるように鳴きだした。

それを見てルークはなんとも嫌そうな顔をして、ティアは顔をすこしほころばせている。

ライガクイーンはゆっくりと身を起こすと卵を守るように前に出た。

懸命に何かを話しているミュウを睨みつけ、振り払うように咆哮をあげた。

ミュウは風圧に弾き飛ばされ、それをあわててイオンが抱きとめた。

「いますぐ去れって、卵が孵化するところだから来るなっていってんですの」

「まずいわね、卵を守るライガは凶暴性が増すはず。

イオン様！ いったん撤退して軍に援軍を要請しましょう」

「はあ？ まじかよ」

「卵が孵ればライガの仔らは大挙して街に襲い掛かるわ。放っておけばエンゲーブの街丸々一つが消滅しかねない」

「いけません！ ミュウ、ライガクイーンにお願いしてください。この土地から立ち去ってほしいと」

「みゆ！ みゆうみゆうみゆ・・・みゆー」

猛々しい叫びを上げて女王は前に歩み出る。

ミュウは泡を食って逃げ帰ると、切羽詰った風に訴えた。

「みゅー、ふざけるなって言ってますのー。」

ボクたちを殺して、孵化した子どももの餌にすると云ってるのですの」

「そんな！」

「イオン様お下がりください！」

ティアは啞然とするイオンの腕を引いて彼の前に立った。

横にいるルークも剣を構える。

「おい、こんなところで戦ったら卵が割れるんじゃないのか？」

「かまわないわ、早いか遅いかの差よ」

「なんだよその言い方！」

「放置して孵化させてしまえば飢えたライガが街を襲うわ。
生まれてくる仔らに罪は無いけど、もうしかたないわ」

「はぁ？ 意味わかんねー」

「来る！」

ティアはイオンにもつと後ろに下がるように指示すると、襲い掛かってくるライガの前面にシールドを展開した。

まごつくライガを睨みつけ、即座に離脱して横面から目を狙って

ダガーを投げつける。

シールドを前足で叩き割ってダガーを避けると、激しい咆哮を上げ雷撃が上空から降り注いだ。

命からがら避けたルークは、ティアに向かって飛び掛るライガクインを見て心臓を縮み上がらせるが、再び展開したシールドで防いでいるのを見てホッとすると、ライガクインに飛びかかった。

ライガクインの背面に勢いよく剣を振り下ろすが、強固な毛皮に跳ね返されてその衝撃で後方に跳ね飛ばされた。

『ティア』

と、どこからともなくアーチャーの呼び声が聞こえた。

『なに？ あなたの出番はまだよ。導師がいる前であなたを使えない』

焦ったようにティアも念話で答えると、苦笑交じりで返事をかえす。

『まあ、それもあるが。後ろ、観客が来てるぞ。』

・・ふむ、どうやら演劇は強制終了のようだ』

何を感じたのか、ティアは術式を放棄して飛び退った。

「インディグネーション！」

上空から激しい雷撃が降り注ぎ、ライガクインは黒い煙を上げ

ながら倒れ伏した。

その衝撃で土煙が上がり沈黙が降り注ぐ。

「ジエイド！」

イオンのその言葉にルークとティアは構えをといた。

「ご無事ですか？ みなさん」

ジエイドはメガネを押さえて、ことさらに明るい笑顔を浮かべた。

言葉を交わしているイオンとジエイドを横目に、ティアは卵が置いてあるライガの巣に歩み寄った。

いくつかはすでに割れているが、運がいいのか悪いのか一個だけ割れずにそのままの姿で残っている。

ティアはそれを見ると顔を歪めたが、すぐに息をついて杖を振りかぶった。

と、その後ろからルークが腕を掴み取り、乱暴な仕草で引き止めた。

「なんてことしやがるんだ！」

「止めないで！」

「やめろよ、せっかく割れずにすんだのに」

「さっきも言ったでしょ！ 残しておいたら、あとあと酷いことになるわ」

「だけど！」

「あなたね、生かしておいてその後のことを責任取れるの？
できもしないくせに横から口出ししないで」

「ふざけんな。この冷血女！」

言い争う二人の横で、ピキピキと卵に亀裂が入り中から何か打ち
付けるような音が聞こえてきた。

それにも気づかず二人はいい争いを続けていた。

横でおろおろしながら見ていたミュウは、それに気づいて恐る恐
る卵に近づいていった。

と、卵から突き破るように縞模様の顔が卵の殻を突き破った。

ミュウはびっくりして逃げ出そうとしたがそれよりも早くに卵が
バランスを崩して倒れるようにミュウの上にもたれかかる。

哀れミュウは卵の殻と生まれたてのライガの下敷きになってしま
った。

「みゅーー！」

生まれたてのライガはミュウを興味津々の顔で見ていたが、おも
むろに大きな口をあけてぱっくりと・・・するとところで、ルークに
救い出された。

ルークはライガの首根っこを掴んでまじまじと見た。

さっきまで対峙していた女王に比べれば凶暴さなどかけらもなく

て、くりくりとした目がルークを見つめている。

「ルーク、それを貸して」

ティアはダガーを構えて冷たい目で手を差し出したが、ルークは慌てて抱きしめて後ろに隠した。

「嫌だよ、ぜってーやだね」

「ルーク!!」

「だめだ! 殺したらだめだ!」

「あなたね・・・」

「おやおや、まるで子猫を拾った子どもと母親のようですねえ」

言い争ってる上から必要以上に朗らかな声が降ってきた。

ジェイドは二人を面白そうな目で見ている。

「いいんじゃないんですか? 彼が責任とって育てるって言うてるんですし」

「カーティス大佐!」

「苗字は呼ばれていませんから、ジェイドでいいですよ。」

彼が責任を取って引き取って育てれば何の問題もないんじゃないですか?

「もちろんそうですね?」

ジェイドは観察するようにルークを見てそう言った。

「ああ、俺が責任として育てるよ。それなら文句無いんだろ？」

「それは・・・」

ルークの言葉に心なしか身体を小さくしてうつむく。

「なら問題ないだろ？いいな？」

背中をよじ登りルークの赤い髪の毛をガジガジしているライガを撫でながら偉そうにティアに言った。

ミュウはそんな二人をおろおろしながら見ている。

「じゃあ、お話は終了ということで森から出ましょうか」

「駄目ですの。長老に報告するですの」

小さな身体を精一杯動かして、ミュウはジェイドに訴えかけた。

「魔物が人間の言葉を？」

「ソーサラーリングの力です。それよりも帰る前にチーグルの住み処へ寄ってもらえませんか？」

「いいでしょう。しかし、時間がないことをお忘れにならないように」

イオンの要請に頷いて、二人を見やると背を向けて歩き出した。

ルークたちもイオンに促されて、荒れ果て主を失った住処を立ち去った。

ライガの子どもはルークの頭に乗って、しっぽをゆらゆらとさせていた。

ティアはそれをチラチラと見ては、ハツとしたように目を背けていた。

しかし、誘惑に勝てなかったのかふらふらと手を伸ばす。

それに気づいたライガは齒を剥き出しにして唸りだした。
ティアはしょんぼりして手を引っ込める。

「嫌われてやんのー」

ルークの言葉に反抗する気力もなく、彼女は弱々しい声でほつといてよと呟いた。

しばし二人は黙ったまま歩いていたが、ティアが突然何かに気づいたようで、周りを見渡すとあさつてのほうに走り出した。

止めるまもなく奥へと走っていったと思ったら、片手にりんごを持って走りよってきた。

「生まれてきたばかりなら、おなかですいてると思うわ。ぴったりとは言わないけどないよりはましね」

ダガーを取り出してりんごを丁寧に切りだし、その切れ端をライガに差し出した。

ルークは思わずライガを隠したが、ライガは興味心身でりんこの切れ端を見ていた。匂いにつられてぱくりと噛み付く。

しばらく、しゃくしゃくとした咀嚼音が森に響いていた。

あちこちに果汁が飛び散って、ルークはいらつとした調子で文句を言った。

「きたねーな。髪がべたべたするだろ」

「我慢なさい、責任取るんでしょ？」

「そうだけだよー」

そんな二人をジェイドは興味深げな目で観察していた。

チーグルの住処にて報告を済ませた後、一行は手を振って送り出すチーグルを背に歩き出した。

新しく仲間になったミュウも一行にまざり、時々振り返って手を振りつつ置いていかれないように懸命に足を動かしていた。

「ご主人様、待ってくださいですよー」

「あー、うつぜー」

ルークはまとわりついてくるミュウを振り払いながら、不機嫌そうに歩いている。ミュウは何を思ったのか、ルークを自分の主人と定めたようで、追放処分を受けている間はルークのそばを離れないと言っただ。

とてもじゃないが受け入れられない話だったのだが、周りの進めもあってしぶしぶながら受け入れることになった。

頭の上でもぞもど動くライガを支えながら、気だるげに歩いているとようやく森の出口にたどり着いた。

「ん？ あいつお前の護衛役だよな」

先ほどライガの巣の中で、ジェイドに耳打ちされて走り去っていたツインテールの女の子が、森の出口でにこやかな笑顔を浮かべて立っていた。

何故かライガが唸り声を上げ始める。

「ええ、アニスです」

おかえりなさいと明るく少女が言う横から、マルクト兵が続々と走りよってきた。武器を構えてルークとティアを取り囲む。

「ご苦労様、アニス。タルタロスは？」

「ちゃんと森の前に来ちゃってますよ。大佐が大急ぎでって言うから、特急で頑張っちゃいました」

ルークがどういうことだと言い寄るのも無視して、前に立つマルクト兵たちに指示を飛ばした。

「その二人を捕らえなさい。正体不明の第七音素を放出していたのは、彼らです」

「ジェイド！乱暴なことは・・・」

「ご安心ください、イオン様」

にっこりと笑って、ジェイドは答えた。

「何も殺そうというわけではありませんよ。お二人が暴れなければ・
ですがね」

ルークは思わず黙り込み、ティアは強い目でジェイドを睨みつけていたが、二人とも武器を下ろして抵抗をやめた。

それを確認するとジェイドは連行するよう言い放ち、兵士たちは武器を取り上げて、縛り上げると乱暴にタルタロスへと連行していく。

ルークは無言で隣を歩くティアを見て、ぎゅっときつく拳を握り締めた。

NGシーン 第5章〜第8章（前書き）

本編とは一切関係ないコネタ集です。
読まなくても何の問題ありません。
息抜きにどうぞ。

NGシーン 第5章〜第8章

第5章

『それよりいいのか?』

『へ?』

こんな旅の途中で買ってどうするのか、ホクホク顔でとうもろこしを買い込むティアにアーチャーは苦笑交じりに指差した。

つなぎを着たい男がルークに何か言っていた。

そして、ぽんと肩を叩いて・・・!

「だめー! やらないでー!」

荷物をしまうのもそこに駆け出した。

ティアは顔をそっとルークの耳のそばに寄せて小さな声で話し始めた。

「サーヴァントのことを話すとね、頭に木が生えてね、その木に実がなるの。」

そしたら、その実を狙ってたくさんの鳥がよってきてね、木も毛も何もかも毛られちゃうの。

そしたらね、その穴に水がたまつてね、魚が泳いで魚釣りができるようになるの」

「まじで？」

「うん、ほんとに」

アーチャーはどつかでそんな昔話を聞いたなあと遠い目をしていった。

第6章

「急ぎましょう、護衛は一体何やってるの！」

そう言つてティアは森の向こうへと走り出した。
ルークも慌ててその後を追う。

暫く行つた先に、白い法衣を着た少年が音叉をかたどつた杖を構えて、熊のきぐるみを被つたモースが懸命に何かを渡そうとしていた。

「おじょうさん（？）忘れ物ですよ」

「あら熊さんありがとうございます。」

お礼に アカシック・トーメント ！！」

だれがお嬢さんだー！という声が森に響いた。

森の奥の木の影から銀色の小さな影が素早い仕草で横切った。

「はぐれメタルです！！」

そうイオンが叫んだのを聞いて、ルークは彼女と小さな影を見比べた後、「待ちやがれ！経験値！！」と叫んで走り出した。

第7章

「余計なことを言ってしまったでしょうか？」

額に手を当てて難しい顔で考え込むティアに、イオンは気遣わしげに彼女を見上げて、労わるような声で尋ねた。

「いいえ、泣いて謝るまで嫌いなにんじんを食べさせればきっと忘れてくれます」

朗らかな笑顔でティアはそう答えた。

得体の知れない悪寒に襲われて、ルークは思わず振り向いた。

その後ろからティアが入ってくると、チーグルたちは何に驚いたのか怯えたように後ずさり、ついには積み重なるようにして積みあがっていった。

そして、チーグルたちは合体し、巨大な顔が目の前に立ちふさがった！

キングチーグルが逃げ出した！

しかし、足が無いので動けない！！

第8章

横でおろおろしながら見ていたミュウは、それに気づいて恐る恐る卵に近づいていった。

と、おもむろに卵が上下真っ二つに割れて、しましまのライガが顔を出した。

ライガは卵の殻を両手で支えて、軽快にリズムを取って踊りだした。

噂によると、大きな街でダンサーとして一大ブームを巻き起こしたらしい。

しばし二人は黙ったまま歩いていたが、ティアが突然何かに気づいたようで、周りを見渡すとあさつてのほうに走り出した。

止めるまもなく奥へと走っていったと思ったら、両手でムゴロウを引っ張って走ってきた。

「野生動物なら・・・」「元の場所に戻してきなさい」ええー!!」

ライガはしつぽをパタパタさせていた。

NGシーン 第5章〜第8章（後書き）

ごめんなさい、ごめんなさい。

それなりに溜まったら、本編と分けようかなと思ってます。

第九章 選択肢の無い問い

仔ライガは目の前の檻をガシヤガシヤと叩いて、目の前に座るルークを見ていた。急ごしらえの小さな檻に入れられて、しょんぼりとした顔でしゃがみこんでいる。

あの後、ルークたちはそのまま陸上装甲艦タルタロスに連行された。

ルークとティアは椅子に座り、不穏な笑顔のジェイドを前にどうなるのかと不安げな顔を浮かべていた。

ミュウもちやつかり椅子を与えられて、行儀よく座っている。

彼らの前にはジェイド、イオン、アニスが立ち、ドアをしつかりと締め切って、部屋はどこか息苦しい雰囲気をかもし出している。

「第七音素の超振動はキムラスカ・ランバルディア王国王都方面から発生。マルクト帝国領土タタル渓谷附近にて収束しました。

超振動の発生源があなた方なら、不正に国境を越え侵入してきたことになりますね」

「・・・そういうことになるらしいな」

ルークは軽く顔を背けて、投げやりに答えた。

正直なところ、こんなよくわからない尋問なんてめんどくさくてやってられないと思っている。だが、だからといってよけいなことをして事態が悪化したらまずいと思うのだ。

こういうタイプはきつと、口を滑らせたら酷いことになる。

（アーチャーがそのいい例だと思う。旅の途中ではそれでしょっちゅう酷い目にあった）

「おや、自分のことなのにずいぶんと適當ですねー」

「うるせーよ」

やっぱりむかつく！

ムッとした顔でその苛立たい顔を睨みつけた。

「ま、それはさておき」

ジェイドはあっさりと流して、言葉を続けた。

「ティアが神託の盾騎士団だということは聞きました。
ではルーク。あなたのフルネームは？」

「ルーク・フォン・ファブレ。」

お前らマルクト軍が誘拐に失敗したルーク様だよ」

その言葉に彼らは驚いた様子でルークを見た。

「キムラスカ王室と姻戚関係にある、あのファブレ公爵のご子息・
・というわけですか」

ジェイドは何か思い巡らせながら、控えめな調子で質問を重ねた。

その横でアニスは何故か、目を輝かせてルークを見つめている。

「何故マルクト帝国へ？ それに誘拐などと・・・。
穏やかではありませんね」

「俺の知ったことかよ。」

お前らマルクトの連中が俺を誘拐したんだろーが」

「少なくとも私は知りませんね。先帝時代のことでしょうか」

「ふん、こつちだつて知るか。」

おかげでガキの頃の記憶がなくなっちまったんだから」

ジェイドは不審げに眉をひそめて何かを呟いた。

「な、なんだよ」

「いえ、何でもありません。ただの独り言ですから。」

それはともかく、今回の行動は・・・」

「誘拐の件はともかく。」

今回の件はルークと第七音素の共鳴が起きてしまったせいで、擬似超振動が起きただけです。ファブレ公爵家によるマルクトへの敵対行動ではありません」

不機嫌な顔をしているルークの代わりに、ティアがそう言った。

まるでティアとの間で起きたのだと言わんばかりの微妙な説明だった。

「大佐。ティアの言う通りでしょう。彼に敵意は感じられません」

イオンはその説明を真に受けた形で納得したようで、ふてくされてそっぽを向いているルークを目で示しながら、イオンが取り成してきた。

「・・・まあ、そのようですね。温室育ちのようですから、世界情勢には疎いようですし」

ルークはその言葉に、またムツとして「けっ、馬鹿にしゃがって」と呟いた。

「ここはむしろ協力をお願いしませんか？」

イオンの言葉に、ジェイドはこう切り出した。

「我々はマルクト帝国皇帝ピオニー九世陛下の勅命によって、キムラスカ王国へ向かっています」

「それは・・・まさか、宣戦布告？」「いや、それはなかつ。それならばイオン導師を引つ張ってくる必要はあるまい。」「違うか、なら何のために・・・」

「まあ、ありがちなのは導師のネームバリューを使おうというものだろうな。戦争回避のために宗教を使うというのはよくあることだ」

「じゃあ、和平交渉？ それにしては教団側の人間が少なすぎない？」

「それは・・・」

「あーもう！ハッキリしろ！」

無言で念話を交わしているティアとアーチャーの話を聞いていて、ルークは状況も忘れて叫んだ。

「おや、見た目通り短気な方ですね」

さりげなく失礼なことを言うジェイドに、周りは思わず苦笑を浮かべた。

ヤレヤレといわんばかりの雰囲気アーチャーの方から漂ってきて、余計にむかついた。

「それはさておき、ぜひともあなたの力をお借りしたいのです。
平和のために。」

そう言っつて真剣な目でルークを見た。

「・・・しかし、いきなり手を貸してくれというのもおかしい話ですね。

こうしましょうか。これからあなた方を解放します。軍事機密に関わる場所以外は全て立ち入りを許可しましょう

まず私たちを知って下さい。その上で信じられると思えたら力を貸して欲しいのです。戦争を起こさせないために」

穏やかな声でそう言っつて、うかがうように黙り込んだ。

「・・・なんだよそれ」

か細い声で呟いた。

訳がわからなかった。戦争とか和平だとかそんな大事に巻き込まれるなんて、屋敷にいた時もあの森から今までの旅でも一度も想像していなかった。

「協力してほしいなら、詳しい話をしてくれればいいだろ」

「説明してなお、ご協力いただけない場合、あなた方を軟禁しなければなりません」

「何・・・！」

「ことは国家機密です。ですからその前に決心を促しているのですよ。」

どうか宜しく願います」

ジェイドは宜しく願いますという感じのしない、胡散臭げな笑みを浮かべて部屋のノブに手をかけた。

「詳しい話はあなたの協力を取り付けてからになるでしょう。待っています」

ドアをくぐる前にそう言って部屋を立ち去った。

それについてイオンも部屋を出る。

アニスはそれについていくことなく、戸口に立ってにややかな表情で二人を見ていた。

「ちっ、なんだよあいつ！むかつくな！」

『やれやれ、面倒なことになったな。どうする？』

『とりあえず、逃走経路の確認だけはしておいて。

あまり力を使いたくないけど、力づくでってことも考慮に入れなきゃいけないかしら』

「おい、無視すんなよ」

「ごめんごめん、で、どーする？」

「どーするつーたってわかんねーよ」

『やれやれ、我俣を言った拳句これか。これだからお坊ちゃまは』

アーチャーの言葉にムツとして口を開く前に、目で制して言葉を重ねた。

「『アーチャーは挑発しないの』

そうね。私にはなんとも言えないわ。

こういうことはあなた自身で決めないといけないもの」

「はあ、めんどくせー」

そんな調子のルークに対してアーチャーは皮肉げに言い放った。

『貴様が変な寄り道を敢行せねば、こんな事態に陥らずにすんだかもな』

『それを言うなら、私にも責任があるわ。

護衛を重視するなら、私情は排除するべきだったもの』

『だが・・・』

『あーうるさい。周りに人がいるんだからいいかげんにして。いいから、さっさと偵察してきなさい』

『・・・了解した』

アーチャーはしぶしぶといった感じで返事をする、音もなくその場から立ち去った。

念話をしている間、ティアは仔ライガに釘付けといった感じで籠の中を見ていた。人差し指を仔ライガの鼻先に突き出してくるくと円を書きながら、困った顔をしている。

それを盗み見しながら、ルークはため息をついた。

結局のところ、ティアは自分のことをどう思ってるのだろうか。屋敷のやつら見たく必要以上に命令しないが、相手にもしない。アーチャーとばかり重要な話をして、俺のことはまるで眼中に無い感じだ。

エンゲーブの宿屋で、アーチャーにもしもの時にはどうにかしてやると言い放ったが、実際のところ俺がいなくてもどうにかするんじゃないだろうか？

そんな後ろ向きなことを考えて頭がぐるぐるした。

思わず髪を掻き毟ったら、ミュウがおろおろしながら「ご主人様元気だすですの〜」と言って顔のそばに近づいてきたので思わず床に叩きつけてしまった。

ティアはそれを見て「ルーク怖いねー。らいらいは気をつけるんだよー」と気楽な調子で仔ライガに話しかけている。やっぱり淡泊な反応で、言いよつの無いイライラを感じた。

そんなことは気にもせず、ティアは仔ライガから目を移し朗らかに提案する。

「ここでうじうじしても暗くなるだけだし、せつかく自由にしていって言うてきてるんだから船内を見て回らない??

私、こんな大きい乗り物に乗るの初めて！せつかくだから見て回りたいな」

そんな彼女の言葉に戸口に立っていたアニスが小走りでよってきた。

「ルーク様！よかつたら私が案内します。いいですか？」

そのテンションに驚きつつ「別にいいけど」というと、一体何が嬉しいのか「ありがとうございますっ」と身をかわいらしくよじつて答えた。

立ち上がって、歩き出そうとすると仔ライガが懸命に檻を叩いて出ようとしている。ルークはそれをしばし見つめていたが、檻から出して頭に載せた。

「さ、いきましょー」と引つ張られるに任せて船内へと歩き出した。

アニスはふつと足を止めて、ティアを上目づかいで見て恐る恐るといった調子で、どこか楽しげな雰囲気の彼女に「もしかして・・私がいたらお邪魔ですかぁ？」などと尋ねてきた。

その質問によくわからないといった表情で首を傾げて、「タルタロスの中のこととはわからないもの。案内してもらわないと逆に困るわ」と答えた。

アニスはそつと顔を伏せて、「天然？計算づく？手強い・・」と

眩いた。

しかし、すぐに何事もなかったかのように笑顔を浮かべた。

「それよりルーク様。タルタロスはどこに行きたいですかあ？」

ルークは困惑した顔で頭を掻こうとして、仔ライガが乗っているのに気づきそのまま仔ライガの頭を撫でた。仔ライガはごろごろとのどを鳴らしている。

「あ？ どこだったってなあ・・・。

俺この船のこと知らねーもんよ。ティアは？」

ミュウはそれを見てムツとして飛び掛ろうとしたが、その前にティアが持ち上げて頭に乗つけた。

「私だって同じよ。任せるわ」

アニスは一つ一つ丁寧に見学可能な場所を上げていく。

艦橋、休憩室、食堂、作戦会議室、寝室、機関室……。ルークが望むような面白い場所などあるように見えなかった。

それでもやらないよりはましとばかりに、一つ一つ艦内を回っていく。

頭に小動物を乗っけながら歩く二人の後姿は、どこか珍妙な雰囲気をももっていた。

第十章 未熟な答え

突き抜けるような青空の下で、陸上装甲艦タルタロスは草原を土煙を上げながら走り抜けていく。

ティアは栗色の髪をなびかせて、甲板の上から望む風景を見ていた。

激しく吹きつける風を感じないかのごとく、微動だにせず視線は彼方の雲を追っていた。

広い空は自由を象徴するという。だが、その空の下にいたとしても自由だとは限らない。

ルークたちが騒ぐ声を漫然と聞きながら、無意識に自分の手の甲をさすった。

言いようの無い冷たいものを感じて、ぎゅっと手を握る。

これがある限り逃れられない。いや、無くなったとしても……。

彼女は耳を塞ぐように顔を伏せた。

楽しげにルークに話しかけるアニスや、少々情けない感じで話すミユウの声。

それに対して投げやりに答えながらも、どこか楽しげなルーク。生き生きとした活気がとても羨ましい。妬ましい。

……私も普通の女の子だったら!!

そんな慣れ親しんだ絶望をいつものように心の奥底に隠して、再び目をしっかりと見開いて自分の周りを観察し始めた。

自由に見てもいいと言った通り、特に厳重な警戒を受けることなく艦内を歩き回ることができた。要所要所に立つ兵士達は油断なく警備を行い、錬度高さをうかがわせる。世界でも有数の最新鋭戦艦に最新の兵器。それに見合うだけの優秀な兵士達。

何よりこのトップの曲者さを見れば、攻略の難しさを感じ知らされた。

『ティア』

自分のおかれている立場の困難さに、軽くうんざりしていると己の従者がすぐそばに立つのを感じた。

『どうかしら』

『一通りの脱出経路は確認した。逃げようと思えばたやすいだろう。だが・・・』

『ルークを連れてとなると厳しいでしょうね』

『そうだな』

『だからと言って、王族に連なるものを敵国の手に渡したままというわけにはいかないし・・・。面倒なことになったわ』

『しかし、仮にも平和の象徴とまで言われている導師イオンが乗っているのだ。早々手荒な扱いはせんだろう。彼らに預けて我々は本来の目的に戻ったほうがいいのではないかね？』

・・・。

顔をこわばらせて黙り込んだ。

彼の言っていることは正しい。正しいのだ。
でも、できるならもう少しだけ……。

「ティア？」

ぬつと赤い髪が視界に映った。

今にも暴れだしそうな顔をして、ティアを睨む。

「どーしたんだよ、変な顔して。

呼んでんだから返事しろよ」

「え？あ、うん。ごめん聞いてなかったわ」

「ったく、どーしたんだよ。なんかまた面白いもん見つけたのか？」

「いえ、そういうわけじゃないけど……」

ティアの足元には仔ライガがまとわりつき、時々一定の方向を警戒する様子で見ている。チーグルの仔もすこし不安げにして二人の間を右往左往していた。

『それで、どうするのだ？ マスター？』

姿は見えないままだが、きつと嫌みったらしい表情をしてるだろうことは見なくてもわかる。反射的に罵ってやりたい気持ちが沸き起こったが、ぐつと抑えて唸るよう黙り込んだ。

『やれやれ先が思いやられるな』

『・・・うるさい』

それを横で聞いていたルークは口をひん曲げて手を引っ張った。

「ほらとつとと行くぞ」

振り向かずにくぐぐいと、ティアの手を掴んで船室に続くドアを
目指して歩く。

「おやおやー。仲がよろしいようで」

「つく！ 強敵！・・・きゃわーん！ ルーク様ーア二スの手
もひっぱってくださいー」

そんな彼女を見てジェイドはにこやかに彼らの仲をからかい、ア
二スはなにを思ったか対抗するように飛び掛ってきた。

それに驚いて仔ライガは走り回りミュウはあわてて周りをくるく
ると飛び回る。

ぎゃいぎゃいと騒ぐ彼らになぜか心が温かくなる気がした。

船室に戻って、ルークたちは黙って紅茶を飲んでいた。

ティアは冷えたからださが少しずつあったまるのを感じながら、す
ぐそばで丸くなった仔ライガを撫でていた。

先ほど兵士に頼んでいた、肉の蒸したものをたらふく食べて今は
クフクフと寝息を立てている。

「よしっ、決めた」

と、先ほどまで黙って何かを考えていたルークがよつと身体を起こして叫んだ。そして、近くで待機していた兵士に話しかける。

「おい」

「ジェイド大佐にお取次ぎいたしますか？」

「ああ、頼む」

「ルーク、決めたの？」

少々お待ちくださいと、部屋を去っていく兵士を見ながらティアはルークに声をかけてきた。

真剣なまなざしを向けられて、思わず目を背けてぶっくらばうに答える。

「どっちにしたって、話聞かなきゃどうしようもないし」

「話を聞いたら本格的に巻き込まれることになるわ、それでもいいの？」

「うるせーな。それにどうせ今までも軟禁されてたんだ。バチカルまで連れてってくれるならどうでもいいや」

「どうでもいいって・・・！　あなたそれ本気で言ってるの！？」

ルークは不満げな顔をして顔を背けた。

イオンは悪いやつじゃないし、あれほど嫌ってたマルクトのやつ

らもそれほど嫌な感じもしない。(ジエイドは除く)

今まで何もできなかった自分に、手を貸してほしいといわれたら悪い気はしない。平和のためにといわれたら特にだ。

それでも、実際のところは彼女達の手を煩わせるのが嫌になったのだ。

彼女らの振る舞いを見れば、断るといったらこの艦全体を相手取ってでもルークの意思を尊重しかねない。彼女にそんなことをさせたくなかった。

ティアはきつい目でルークを睨みつけた。

自分の役目と彼とを秤にかけて引き裂かれそうな思いをしていたのに、そんな適当な考えで答えを出すなんて。

こんなならとっと見捨てればよかった。何でこんなのため悩んでたんだろう？

「信じらんない。ばつかじゃないの？」

「ばかっていうほうがばかなんだぞ！　ばか！」

「ばか！　ばかばか！」

「うるせーよばか！　じゃあ、聞かないって言ったらどうするつもりだったんだよ」

「それは……。『あらゆる手段を使っても脱出させるわ、多少被害は出るでしょうけど……。』」

「だから、それが嫌なんだって！」

「は？」

ルークは顔をほんのりと赤らめながらそんなことを口にした。

ティアはぽかんと口を開いて、そんな彼を見ていた。

はて、どういう意味だろう？ そんなに被害を出すのが嫌なのだろうか。

『ふん、彼はこれ以上ティアに迷惑をかけたくないということらしいぞ。』

それなら最初からもう少し気を使ってほしかったものだが。

まあ、気持ちはわからんでもないな。

いかに世間知らずのお坊ちゃんといえども、私のマスターみたいな美女をこきつかっているのは気がとがめるだろう』

「え？」

「ば、ばか勘違いするなよ。」

別にお前が心配だからとかそういうわけじゃ・・・」

『やれやれ、いじつぱりもここまで来ると病気だな』

アーチャーは呆れた様子で笑った。

騒ぎに目を覚ました仔ライガは、眠たげな目で二人を見ていた。のっそりと起き上がると、言い訳を探してオロオロしているルークの足元に近づいてきた。

そして、がぶりと足に噛み付いた。

大きな叫び声と慌てて走りよる音。

二人にしか聞こえない笑い声が船室に響いていた。

「いやー、お楽しみだったようですねー」

「ぜんぜん楽しくねーよ」

ジェイドのからかい交じりの言葉にルークは投げやりに答えた。
なぜかティアはどこか心ここにあらずといった感じた。

そんな二人を前にして、ジェイドはにこやかに二人を見渡した後
表情を改めた。メガネを軽く直して思い口調で言葉を続ける。

「昨今、マルクト・キムラス力を挟んだ国境付近で、局地的な小競
り合いが頻発しています。

恐らくは近いうちに大規模な戦争が始まるでしょう。
そこで、ピオニー陛下は平和条約締結を提案した親書を送ることに
したのです」

「僕は中立の立場から、使者として協力を要請されました」

イオンも補足するように続けた。

「それはイオン様の意思ですか、それとも教団の？」

イオンの言葉にティアはなにを思ったのか量るような質問を投げ
かけた。

ごまかしは許さないといった厳しい目でイオンを見ている。

「間違いなく私の意志です」

「それで、ローレイ教団は・・・？」

誇るように答える彼に確認するように質問を重ねると、「それは・
・」と困った様子で目をさまよわせた。

そのやり取りを興味深げに見ていたジェイドはかばうように口を開いた。

「嫌なところ突いてきますねー。確かに、教団の総意とは程遠いと言えます。」

現在ローレイ教団は、イオン様を中心とする改革的な導師派と、大詠師モースを中心とする保守的な大詠師派とで派閥抗争を繰り広げています」

「モースは戦争が起きるのを望んでいるんです。僕はマルクト軍の力を借りて、モースの軟禁から逃げ出してきました」

イオンの話にティアは驚きの声を上げた。

「そんな、大詠師モースが戦争を??」

モース様は預言の成就だけを祈っておられるはず・・・」

「ティアさんは大詠師派なんですね。ショックですう・・・」

アニスの言葉にティアは顔を歪めた。

「私は中立よ。どちらかに加担するなんてありえない」

「おや、妙な言い回しですね。ありえない・・・ですか」

ジェイドの指摘にティアは微妙に困った顔をして顔を背けた。

「おい、俺を置いてけぼりにして勝手に話を進めるな！」

「ああ、済みません。あなたは世界のことを何も知らない『おぼっちゃま』でしたねえ」

完全に話についていけないルークが怒りの声を上げると、ジェイドは肩をすくめた。

「ああ？なんだとう！？」

そんなルークをかまうことなく話は続く。

「教団の実情はともかくとして、僕らは親書をキムラスカへ運ばなければなりません」

イオンはとりなすように言うと、

「しかしながら、我々は敵国の兵士です。いくら和平の使者といっても、すんなりと国境を越えるのは難しい。ぐずぐずしては大詠師派の邪魔が入ります。その為に、あなたの力・・・いえ、地位が必要です」

ジェイドはそれに続けて説明を重ねた。

「おいおい、おっさん。その言い方はねえだろ？それに、人にものを頼むときは、頭下げるのが礼儀じゃねーの？」

「いいじゃない、わかりやすくて」

「あん？どーゆー意味だよ」

ティアのどこかポイントのずれた言葉にルークはきつと睨みつけた。

「そのままの意味ですけど？」

「馬鹿にしてんのか！？」

「いえ、そんなつもりは・・・」

「はいはい、痴話げんかは外でやってくださいね」

「「違う（います）！！」「」」

「つたく、いったいなんなんだよ。……で？」

ドカッと座りなおして、偉そうにふんぞり返ってジェイドを見た。

「やれやれ」

ジェイドは肩をすくめた。

そして片膝をつき、貴人にする動作でうやうやしく礼をする。周りで引き止める声が上がったが、動じずに請う。

「どうか、お力をお貸してください。ルーク様」

「あんだ、プライドねえなあ」

「生憎と、この程度のことに腹を立てるような安っぽいプライドは持ち合わせていないものですから」

ルークの無神経な言葉にも大して動じずに、にこやかな笑みを浮かべた。

「分かったよ。伯父上に取り成せばいいんだな」

「ありがとうございます。私は仕事があるので失礼しますが、ルーク様はご自由に」

「呼び捨てでいいよ。キモイな」

「分かりました。ルーク『様』」

嫌みったらしく答えてジェイドは船室から出て行った。

どこか悄然としているルークに「ご主人様元気だそうですのー」とミュウが飛びついた。

むきになってミュウを叩き落したり、それをティアが止めようとしたりするさまをイオンは困った顔で見てた。

第十章 未熟な答え（後書き）

このティアさんはとってもシビアな設定です。
ホントにかなり。いろいろと。

設定が公開されるのは先の話になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1395y/>

深淵を引き裂く運命の剣

2011年11月26日16時54分発行